



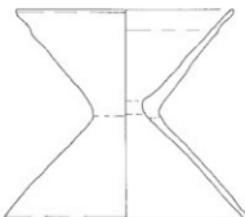
岡山南遺跡 1地区 全景（南から）



岡山南遺跡 溝1出土遺物

四條畷市文化財調査年報

第 3 号



平成28(2016)年3月

四條畷市教育委員会

例　　言

1. 本書は、四條畷市文化財調査年報の第3号であり、四條畷市文化財調査報告の第52集である。本書には、平成16(2004)年8月と平成17(2005)年4月から5月にかけて宅地造成(MNK2004-1)と保育園建設(MNK2005-1)に伴い南野米崎遺跡で実施した埋蔵文化財発掘調査と、平成27(2015)年4月から5月にかけて実施した岡山南遺跡(OM2015-1)での宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告を掲載する。
2. 南野米崎遺跡(MNK2004-1・2005-1)の発掘調査は、森本和之氏からの依頼を受け実施した。岡山南遺跡(OM2015-1)の発掘調査は、フジ住宅株式会社からの依頼を受け実施した。いずれも四條畷市教育委員会が調査を実施し、調査期間等は本文中に記載している。
3. 南野米崎遺跡(MNK2004-1・2005-1)の発掘調査は、四條畷市教育委員会社会教育課主任 野島 稔の指導のもと、技術職員 村上 始(肩書はいずれも当時)を担当者として実施した。岡山南遺跡(OM2015-1)の発掘調査は、四條畷市教育委員会地域教育課課長代理 兼主任 村上 始・事務職員 實盛良彦を担当者として実施した。
4. 南野米崎遺跡(MNK2004-1・2005-1)の発掘調査の実施にあたっては、森本和之氏、社会福祉法人 ふみわ福祉会、(株)新木本住宅、Be・Craft 張博氏、創造工房楽太 三ツ川和宏氏、地元自治会から多大なる御配慮・御協力を得た。岡山南遺跡(OM2015-1)の発掘調査実施にあたってはフジ住宅株式会社、地元自治会から多大なる御配慮・御協力を得た。記して厚く感謝の意を表したい。
5. 発掘調査の進行・本書の作成・出土遺物の鑑定などにあたっては、以下の方々から御指導・御協力を得た。厚く感謝の意を表したい。

大阪府教育委員会文化財保護課、櫻井敬夫氏(故人)、瀬川芳則氏(元関西外国语大学教授)、塙山則之氏(生駒ふるさとミュージアム館長)、村瀬 陸氏(奈良市埋蔵文化財調査センター)、森本 徹氏(大阪府立近つ飛鳥博物館)、濱田延充氏(寝屋川市教育委員会)、黒田 淳氏(大東市教育委員会)、野島 稔氏(四條畷市立歴史民俗資料館館長)、佐野喜美氏(前四條畷市立歴史民俗資料館館長)。(順不同)
6. 出土遺物の整理・図面作成などは、四條畷市教育委員会地域教育課課長代理 兼主任 村上 始、事務職員 實盛良彦が、駒田佳子、田伏美智代の協力を得て行った。
7. 本書は、村上・實盛が、分担して執筆・編集を行った。文責者は各文末に記載している。
8. 発掘調査の出土遺物および記録した写真・実測図面等は四條畷市教育委員会が保管している。

凡　　例

1. 本書中のレベルは、T.P.(東京湾平均海面)を用いた。
2. 土色の色調は、1998年度版『新版 標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
3. 南野米崎遺跡(MNK2004-1・2005-1)の平面図表示方位は磁北である。岡山南遺跡(OM2015-1)の平面図表示方位は世界測地系の国土座標(第VI座標系)に基づく座標北である。

本 文 目 次

卷頭写真図版

例 言・凡 例

目 次

第1章	遺跡の位置と歴史的環境	6
第1節	遺跡の位置と既往の調査	
第2節	周辺の歴史的環境	
第2章	南野米崎遺跡（MN K2004-1・2005-1）調査の経過	12
第1節	調査の経過	
第3章	南野米崎遺跡（MN K2004-1）調査の成果	14
第1節	基本層序	
第2節	検出遺構	
第3節	出土遺物	
第4章	南野米崎遺跡（MN K2005-1）調査の成果	17
第1節	基本層序	
第2節	検出遺構	
第3節	出土遺物	
第5章	南野米崎遺跡（MN K2004-1・2005-1）調査のまとめ	27
第1節	調査のまとめ	
第6章	岡山南遺跡（OM2015-1）調査の経過	28
第1節	調査の経過	
第7章	岡山南遺跡（OM2015-1）調査の成果	30
第1節	基本層序	
第2節	検出遺構	
第3節	出土遺物	
第8章	岡山南遺跡（OM2015-1）調査のまとめ	46
第1節	調査のまとめ	
第2節	讃良地域の古墳時代前期	
参 考 文 献		51
写 真 図 版		
報 告 書 抄 錄		

挿 図 目 次

第1図 南野米崎遺跡昭和59年度調査平面図と出土遺物	7
第2図 周辺遺跡分布図	9
第3図 調査地区位置図 (MN K2004-1・2005-1)	12
第4図 調査地区平面図・断面図 (MN K2004-1)	14
第5図 出土遺物 (MN K2004-1)	15
第6図 調査地区平面図・断面図 (MN K2005-1)	19～20
第7図 遺物出土状況図・断面図 (MN K2005-1)	21
第8図 出土遺物 (MN K2005-1) (1)	23
第9図 出土遺物 (MN K2005-1) (2)	26
第10図 調査地区位置図 (OM2015-1)	29
第11図 調査地区平面図 (OM2015-1)	31～32
第12図 1地区断面図 (OM2015-1)	33
第13図 2・3地区断面図 (OM2015-1)	35
第14図 溝1遺物出土状況図 (OM2015-1)	37～38
第15図 溝1・2合流部遺物出土状況図 (OM2015-1)	39
第16図 出土遺物 (OM2015-1) (1)	43
第17図 出土遺物 (OM2015-1) (2)	44
第18図 出土遺物 (OM2015-1) (3)	45
第19図 讃良地域の古墳時代前期遺跡	49

写 真 図 版 目 次

- | | | |
|---------|--|--------------|
| 写真図版 1 | 1. 調査前全景（西から）
2. 遺構面検出全景（南西から） | (MN K2004-1) |
| 写真図版 2 | 1. 遺構完掘全景（南西から）
2. 遺構完掘全景（南東から） | |
| 写真図版 3 | 1. 調査前全景（北から）
2. 東側地区 遺構完掘全景（南から） | (MN K2005-1) |
| 写真図版 4 | 1. 東側地区 土坑 8 遺物出土状況（南西から）
2. 東側地区 土坑 13 遺物出土状況（北東から） | |
| 写真図版 5 | 1. 東側地区 溝 25 全景（北西から）
2. 西側地区 遺構完掘全景（北東から） | |
| 写真図版 6 | 1. 1 地区 遺構完掘全景（北西から）
2. 1 地区 溝 1 遺物出土状況（南東から） | (OM2015-1) |
| 写真図版 7 | 1. 1 地区 溝 1・2 合流部遺物出土状況（南西から）
2. 2 地区 遺構完掘全景（南東から） | |
| 写真図版 8 | 1. 2 地区 子持勾玉出土状況（西から）
2. 3 地区 遺構完掘全景（南東から） | |
| 写真図版 9 | 1. MNK2004-1 出土遺物
2. MNK2005-1 出土遺物（1） | |
| 写真図版 10 | 1. MNK2005-1 出土遺物（2）
2. MNK2005-1 出土遺物（3） | |
| 写真図版 11 | 1. OM2015-1 出土遺物（溝 1 瓢）
2. OM2015-1 出土遺物（溝 1 土師器） | |
| 写真図版 12 | 1. OM2015-1 出土遺物（溝 1・2 合流部）
2. OM2015-1 出土遺物（溝 2 木製品） | |
| 写真図版 13 | 1. OM2015-1 出土遺物（河川 11）
2. OM2015-1 出土遺物（河川 11 子持勾玉） | |

第1章 遺跡の位置と歴史的環境

第1節 遺跡の位置と既往の調査

四條畷市は、大阪府の北東部に位置する。市のほぼ中央部に、生駒山に続く飯盛山系がそびえ、市を東の田原盆地と西の四條畷地区に分けている。飯盛山系から西に向かって、讚良川・岡部川・清瀧川・権現川が流れている。生駒山系の西側斜面の枚方台地は、北は京都府八幡丘陵から南は四條畷市南野丘陵までの淀川左岸にひろがる広大な丘陵・段丘があり、北から枚方市船橋川・穂谷川、交野市天野川、寝屋川市寝屋川、四條畷市讚良川・清瀧川などの中小河川によって開かれている。南野米崎遺跡・岡山南遺跡は、いずれも飯盛山系の西側の山裾部に位置する遺跡である。

南野米崎遺跡

南野米崎遺跡は四條畷市米崎町・塚脇町・中野一丁目・中野新町・楠公一丁目・楠公二丁目に所在し、東西約330m・南北約570mの範囲が古墳時代と中世の集落跡として周知されている。南野米崎遺跡は、生駒山系の西側斜面から西流する清瀧川と江鶯川に挟まれた扇状地性低地の西端に立地する。この遺跡は、1977年から78年にかけて行われた旧国鉄片町線複線化工事で土師器がみつかったことから注意され、今回報告する調査地の南約200mのところで1984年に実施した四條畷市土地開発公社の住宅代替地開発工事に伴った約900m²の発掘調査で発見された。この調査では、東西方向に長さ約40m・幅約5.5m・深さ約1.7mのU字状を呈する大溝を検出し、そこから馬下顎歯をはじめ、滑石製勾玉・白玉・有孔円板、桃核、陶質土器・韓式系土器・製塙土器・土師器・須恵器などの土器類などが出土した(野島1985, 1987e, 1991、四條畷市教育委員会編2004、四條畷市史編さん委員会編2016)。

馬下顎歯は大溝の左岸肩部から左臼歯の上に右臼歯が重なった状態で出土し、4~5歳の馬と推定される。馬歯のすぐ近くからは滑石製白玉29個が一列に並んで出土した。大溝内の土器出土状況は、土師器高杯が大溝肩部に立て並べられていた状態で出土し、大溝内中央部では多量の土師器・須恵器・木製品とともに手捏ね土器・製塙土器・韓式系の平底鉢や壺、陶質土器壺・無蓋高杯などが出土した(第1図)。大半の各種土器は完形品であった。この大溝は古墳時代中期のものとみられる。また、この調査では中世の遺構も同一面で検出している。遺構種別としてはその他掘立柱建物や木棺直葬墓も検出しているほか、古墳時代前期の土器もいくつか出土した。

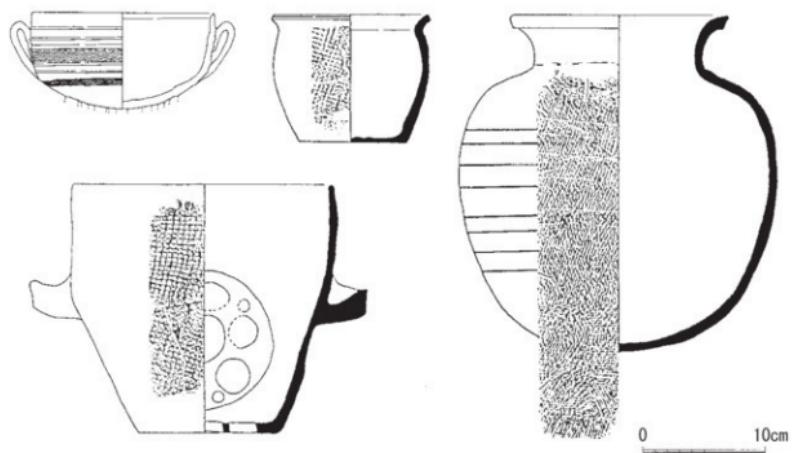
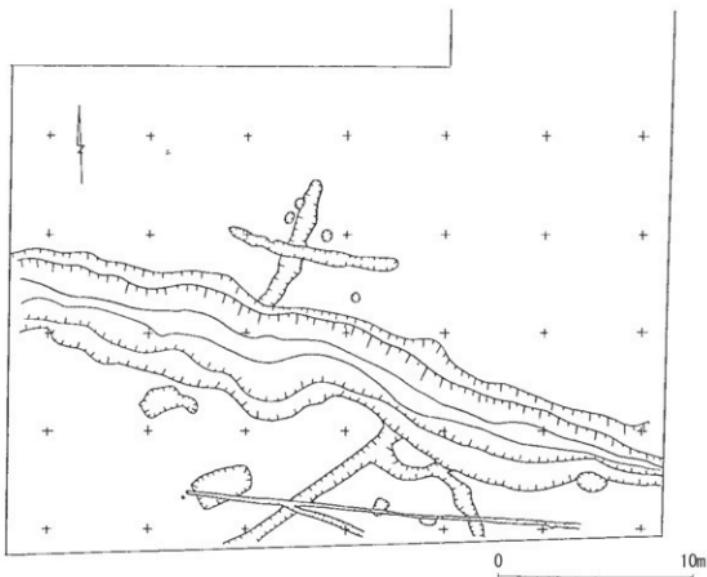
その後2000年にも遺跡南端でパチンコ店建設に伴い調査を実施し、中世の集落を検出している。

岡山南遺跡

岡山南遺跡は、四條畷市大字岡山・岡山東1丁目を中心に広がる、旧石器時代・縄文時代・古墳時代・平安時代・中世の集落跡である。この遺跡は1975年の府道枚方富田林泉佐野線新設バイパス建設工事中に発見された遺跡で、その後1976年10月にかけて同工事に伴い3次にわたって発掘調査を行った(野島・藤原・花田1976)。1次調査は確認調査で、古墳時代~中世にわたる遺跡を確認した。2次調査では古墳時代の掘立柱建物や堅穴建物を検出し、堅穴建物を中心多くの遺物が出土した。3次調査では古代~中世の掘立柱建物を複数検出した。これらの掘立柱建物の柱穴からは皇朝十二銭の乾元大宝が出土した。この遺構面の下層からは古墳時代の大溝2本(大溝A・B)、井戸1基等を検出した。この大溝のうち大溝Bからは、土器類とともに家形埴輪や蓋形埴輪、動物形埴輪などの形象埴輪や朝顔形埴輪、円筒埴輪などが多数出土した。また、これらの遺物とともに縄文土器や石鐵・磨製石斧、後期旧石器時代後半の木葉形搶先形尖頭器も出土した。

1976年11月には4次調査として大阪瓦斯天然ガス埋設工事に伴い発掘調査を行い、3次調査の大溝Bが逆S字状に蛇行する溝であることが分かった(野島1979, 1982)。この溝は埴輪を出土しながら古墳の周溝ではないことがわかり、集落内を区画する溝の可能性が考えられている(野島1982)。また大溝B内からは、円筒埴輪や土器類とともに木製下駄が出土した(野島1979)。この下駄は左足用のもので、伴出遺物から古墳時代中期のものであり、他例と比較しても極めて古い出土例である(野島1979、瀬川1992、本村2006)。

1981年2~4月には5次調査として四條畷市開発公社の委託で調査を実施し、古代~中世の集落跡



第1図 南野米崎遺跡昭和59年度調査平面図と出土遺物（野島 1987e・1991より）

と古墳時代中期の集落跡を検出した（野島 1982）。古代～中世の遺構面では中世の掘立柱建物や平安時代の板枠井戸などを検出し、井戸内からは「田内急」と墨書きされた黒色土器などが出土した。古墳時代中期の遺構面では数多くの円筒埴輪や形象埴輪が出土し、掘立柱建物を検出した（野島 1982）。掘立柱建物周辺からは馬具が出土した（野島・前田 1984）。この調査個所は大溝Bに西接する場所に当たり、この点からも大溝Bは集落内を区画する溝とみられる（野島 1987b）。

1981年7月からは6次調査として宅地開発に伴い発掘調査を行い、3次調査の2本の大溝の続きと、掘立柱建物を検出した（野島 1982）。このうち大溝Aでは、最下層から縄文時代晩期の土器や石器類が出土した。

1983年には忍ヶ丘ハイツ建設に伴い7次調査を行い、古墳時代後期の溝、鎌倉時代末の掘立柱建物、室町時代の落込を検出した（野島・前田 1984）。古墳時代後期の溝からは土器類や埴輪類、鉄鏟、勾玉のほか円孔が穿たれ垂下可能な砥石が出土した。

1986年には民間社宅建設に伴い8次調査を行い、古墳時代中期の掘立柱建物、平安時代の掘立柱建物、方形板枠井戸、中世の掘立柱建物、溝などを検出した（野島 1987b）。特に平安時代の井戸からは「高田宅」「福万宅」の墨書きがある黒色土器3点などが出土した。この調査地では1992年にも追加で調査を行い、竪穴住居や井戸、掘立柱建物など集落の続きや方墳状にめぐる溝などを検出した。

1995年にはマンション建設に伴い調査を行い、中世の掘立柱建物や素掘井戸などを検出した。2003年の駐車場造成に伴う調査では中世の井戸等を検出した（村上 2004）。2007年には道路拡幅工事に伴い2度にわたって調査を行い、中世の集落跡と畑地遺構を検出した（村上・實盛 2013a）。2009年には民間宅地造成に伴い調査を行い、掘立柱建物など中世の集落を検出した。

第2節 周辺の歴史的環境

南野米崎遺跡、岡山南遺跡の周辺の遺跡では、旧石器時代からの各時代の遺構・遺物がみつかっている（第2図）。

旧石器時代 讀良川床遺跡では旧石器時代の握斧・ナイフ形石器・細石刃・削器・彫器などが出土している（櫻井 1972）。また、忍岡古墳付近では、縦長剥片を用いたナイフ形石器が採集されている（片山 1967a）。岡山南遺跡では、後期旧石器時代後半の木葉形尖頭器が出土している（野島・藤原・花田 1976）。

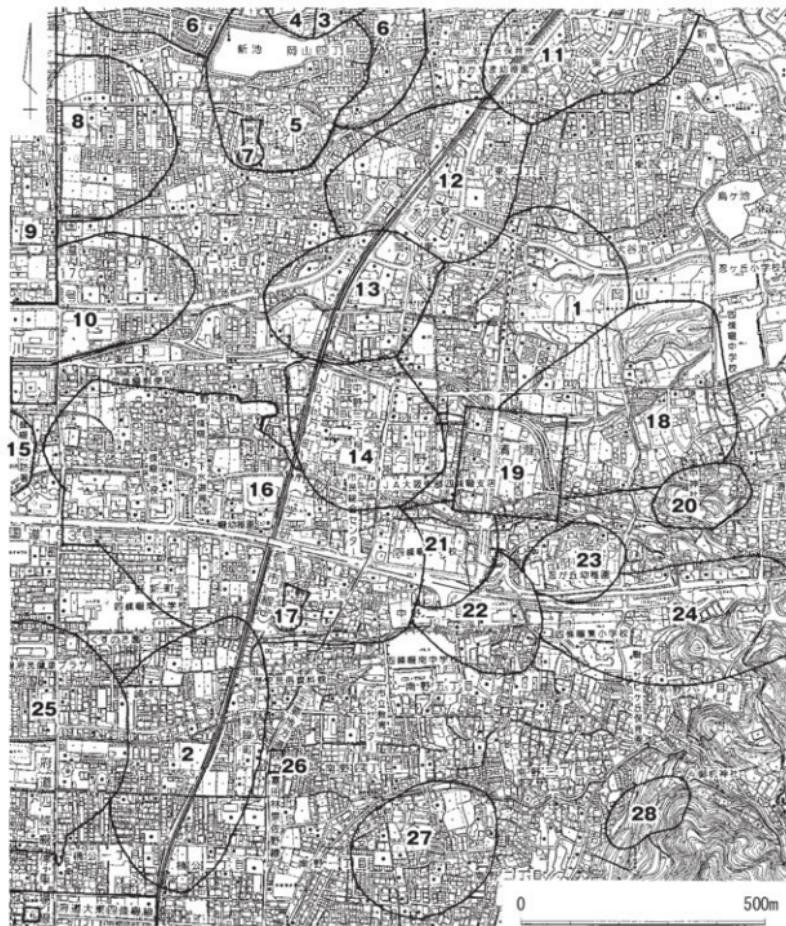
縄文時代 縄文時代草創期の有茎尖頭器が南山下遺跡（野島 1978b）、四條畷小学校内遺跡（野島 1994c）、木間池北方遺跡（村上 1997a）などでみつかっている。讀良郡条里遺跡の第二京阪道路調査地では縄文草創期末からの各時期の遺物が出土しており、石器製作跡も検出されている（井上ほか編 2003、佐伯ほか編 2007、井上編 2008 等）。南山下遺跡では中期の集落跡が検出されている（野島 1978b、1988）。

砂遺跡では中期から晩期の集落跡がみつかっている（宮野1992、四條畷市教育委員会編2008）。集落内にはイノシシ等動物の足跡が残されていた。晩期では土偶等も出土している。

後期・晩期の遺跡として更良岡山遺跡がある。寝屋川市の讀良川遺跡に東接しており集落の中心が移動したものとみられ、北陸からの大型彫刻石棒・ヒスイ製祭祀具をはじめ、土偶などの祭祀用品、土器類や多量の石器類が出土した。また晩期の土壙墓が複数確認されている（片山 1967b、櫻井 1972、宮野 1992、野島編 2000）。

弥生時代 弥生前期初頭の土器が縄文晩期の突帯文土器とともに讀良郡条里遺跡の2005年の調査でみつかっている（中尾ほか編 2009）。ここでは炭化米も出土しており、北河内地域における稻作の初現を示す遺物として重要である。讀良郡条里遺跡ではこれら以外にも前期から後期までの水田・微高地の集落が検出されている（後川・實盛・井上編 2015）。

雁屋遺跡は弥生前期から後期にわたって続く拠点の集落である。前期では板付II式併行期に属する大形壺の出土や（野島1984）、集落の検出がある（村上2001f）。中期では初頭から後葉までの方形周溝墓群が各調査で検出され、保存状態の良いコウヤマキ・ヒノキ・カヤ製の木棺のほか、朱塗り土器・蓋付木製四脚容器やタンカ状木製品、鳥形木製品などが出土している（辻本1987、野島1987a、野島1994a、



第2図 周辺遺跡分布図

- | | | | |
|---------------|-------------|-----------|-------------|
| 1. 岡山南遺跡 | 2. 南野米崎遺跡 | 3. 讃良川床遺跡 | 4. 讃良寺跡 |
| 5. 更良岡山古墳群 | 6. 更良岡山遺跡 | 7. 忍岡古墳 | 8. 北口遺跡 |
| 9. 讃良郡条里遺跡 | 10. 奈良田遺跡 | 11. 坪井遺跡 | 12. 忍ヶ丘駅前遺跡 |
| 13. 南山下遺跡 | 14. 奈良井遺跡 | 15. 鎌田遺跡 | 16. 中野遺跡 |
| 17. 墓ノ堂古墳 | 18. 清滝古墳群 | 19. 正法寺跡 | 20. 国中神社内遺跡 |
| 21. 四條畷小学校内遺跡 | 22. 木間池北方遺跡 | 23. 大上遺跡 | 24. 城遺跡 |
| 25. 雁屋遺跡 | 26. 伝和田賢秀墓 | 27. 南野遺跡 | 28. 近世墓地 |

阿部1999）。焼失堅穴住居や掘立柱建物、貯木施設も検出され、分銅形土製品やト骨・銅鐸の舌や骨、筒形土器などが出土している（野島1994a、村上・實盛2011）。また2011年の調査ではサヌカイト埋納土坑を検出している。後期でも、堅穴住居群や方形周溝墓などが検出され（野島1987a、阿部1999）、丹後・近江・出雲・山陰地域系の土器類などを含む多くの遺物が出土している（三好ほか2007）。雁屋遺跡の銅鐸舌と関連するものとして、明治44年に四條畷の「砂山」から入れ子になった銅鐸2口が出土したと伝えられ（梅原1985）、現在関西大学が所蔵している。

鎌田遺跡では弥生時代中期の方形周溝墓が5基みつかっている（野島1994b）。1号方形周溝墓には墳丘のほぼ中心に埋葬施設が1基あり、コウヤマキの組合式木棺材が残存していた。2号方形周溝墓の周溝からは完形の打製石剣が出土した。

このほか四條畷小学校内遺跡で前期の石敷き遺構が（野島1994c）、藤屋北遺跡で中期の集落・方形周溝墓が（岩瀬編2012）、中野遺跡で後期の遺構が検出されている（野島1986b）。

古墳時代 讃良川流域で古墳時代前期中頃に全長約87mの前方後円墳である忍岡古墳が築造されている（梅原1937）。主体部は堅穴式石室（石櫛）で、碧玉製の石剣・鋸形石・紡錘車・鉄劍・鉄鎌、小札片など副葬品の一部が出土している。

この古墳に伴うとみられる前期の集落は、讃良郡条里遺跡で微高地の集落が検出されている（井上編2008、近藤ほか編2006、佐伯ほか編2007、後川・實盛・井上編2015）。また岡山南遺跡でも集落を検出している（今回報告）。

中期の古墳としては、全長約62mの前方後円墳である墓ノ堂古墳があり、立会調査で円筒埴輪片が出土している（野島1997c、櫻井・佐野・野島2006）。忍ヶ丘駅前1号墳では琴を弾く男性埴輪が出土している（野島1993a、1997a）。清滌古墳群（野島1980a）や大上古墳群・更良岡山古墳群（野島1981）などは中期から後期まで続く馬飼い集団の墓域とみられる。中でも城遺跡内の大上3号墳は全長約45mある後期の帆立貝形古墳で、主体部は削平されていたが周溝と墳丘の一部を検出し、原位置を保つ葺石や円筒埴輪が出土した（村上2006）。清滌古墳群2号墳は、直径20mの円墳で、周溝に馬が埋葬されていた（野島1980a）。大上1号墳は横穴式石室を主体とし、鎌倉時代に盃堀されていたが、金鋼製空中耳環が1点出土した（野島1999、四條畷市教育委員会編2002）。

JR忍ヶ丘駅付近では集落から中期の形象埴輪が多く出土している。忍ヶ丘駅前遺跡で人物埴輪・子馬形埴輪・水鳥形埴輪（櫻井・佐野・野島2006、2010等）、南山下遺跡で馬形埴輪（野島1987c、d）、岡山南遺跡で家形埴輪が出土していて（野島1982）、一緒に左足用の木製下駄も出土している（野島1979、1982、瀬川1992）。

古墳時代における四條畷の大きな特徴は、中期に馬の飼育が始まったことである。古墳時代中期以降この地域では全域で渡来系の人々が多く居住していたとみられ、広範に馬飼も行われていて、奈良田遺跡（野島1980c、野島・村上2000）、中野遺跡・四條畷小学校内遺跡（村上2000等）、城遺跡・大上遺跡（村上2006）、南野米崎遺跡（野島1985、1987e、1991、四條畷市教育委員会編2004）などの集落遺跡で馬骨・馬歯をはじめ陶質土器、初期須恵器や韓式系土器等が数多く出土している。讃良郡条里遺跡で5世紀初頭の馬骨の出土がみられ（中尾ほか編2009）、藤屋北遺跡では馬具の鏡・ハミ・鞍や、井戸枠に再利用された準構造船、埋葬馬が完全な姿で出土しており、河内湖岸の集落とみられる（岩瀬ほか編2010、岩瀬編2012）。鎌田遺跡では溝からスリザサラや木鐵、祭具を載せる台等の祭祀遺物が出土し（村上2001c、d、e）、奈良井遺跡では方形周溝状の祭祀施設遺構を検出し、犠牲馬の首や人形・馬形土製品等が出土している（野島1980b、野島・村上2000、野島・村上・實盛2012）。これらの人々を支えた生産遺跡として、鎌田遺跡や讃良郡条里遺跡では水田跡がみつかっている（野島1993b、中尾ほか編2009等）。讃良郡条里遺跡の2011年度の調査では水路の堤防構築に敷葉を使った工法が用いられていた（後川・實盛・井上編2015）。北口遺跡では管玉や緑色凝灰岩質の石核が出土し、中期に玉類の製作が行われたとみられる（村上・實盛2014）。

古代以降 正法寺跡は、7世紀に創建された寺院跡で、これまでの調査で中門、塔、講堂などの存在が確認されており、平安時代ごろの建物はいざれも石積み、あるいは瓦積みの基壇建物である（大阪府教育委員会編1970）。一方、創建当時の建物の多くは掘立柱建物であった（村上2001a）。ただし、中門は礎石建物で（野島・藤原・花田1977）、塔は石積みの遺構を伴っていた（大阪府教育委員会編1970）。

また回廊の南西部分にあたると推定される位置の瓦だまりから創建時の鶴尾片が出土している(野島・村上 2002)。

讃良寺跡は1969年に部分的に調査されており、7世紀の創建であることが分かっている(桜井1972、櫻井・佐野・野島 2006、2010)。正法寺跡のものと同様の素夷八葉蓮華文軒丸瓦が出土しているが(野島編 2000)、文様に型起因の摩耗がみられ、讃良寺のものが後に作られたと考えられている(野島 1997b)。

飛鳥～奈良時代には寺跡の近辺を中心に集落跡がみつかっている。正法寺近辺では河川跡の数箇所で土馬を使った祭祀がおこなわれていて、木間池北方遺跡で円面鏡や土器と共に土馬が7体出土した(村上2006)。木間池北方遺跡で「口万呂」(村上2006)、南野遺跡では「大」の字を墨書した土器が出土している(野島1995)。讃良郡条里遺跡では小型海獸葡萄鏡が出土しており、有力者が祭祀に用いたとみられる(後川・實盛・井上編2015)。また、讃良郡条里遺跡では奈良時代に遡る条里制地割が検出されており、初期の条里制地割実例として注目される(中尾・山根編2009)。

平安時代には中野遺跡や、岡山南遺跡、讃良郡条里遺跡のほか、四條畷小学校内遺跡(村上 2000)、木間池北方遺跡(村上 2006)、蘿屋北遺跡(岩瀬ほか編 2010)などで集落が検出されている。中野遺跡では「日置」と墨書された土師器坏や(村上 2006)、「應保二年如月廿日」と書かれた墨書曲物井戸枠が出土している(村上 2003)。岡山南遺跡では掘立柱建物群が検出されていて(野島・藤原・花田 1976、野島 1987b)、井戸からは「高田宅」「福万宅」などの墨書土器が出土している(野島 1987a)。讃良郡条里遺跡では皇朝十二銭を用いた溝内祭祀跡を検出している(後川・實盛・井上編 2015)。

大阪から奈良へと向かう街道のひとつである清滌街道を、飯盛山系の西麓まで下りきらない地点には、延喜式神名帳に記載される式内社の国中神社が鎮座している。四條畷市内には、他に御机神社と忍陵神社が式内社としてあげられるが、延喜式の時代から場所を変えずに残っている神社はこの国中神社だけである。

鎌倉時代から室町時代にかけては、奈良井遺跡(村上 2003a)、南山下遺跡(野島・村上 2001、村上 2001b)、岡山南遺跡(野島・藤原・花田 1976、野島 1982、野島・前田 1984、野島 1987b、村上 2004、村上・實盛 2013a)、中野遺跡(野島 1977、1986b、西尾 1987)、忍ヶ丘駅前遺跡(野島 1983、村上 1997b)、四條畷小学校内遺跡(村上 2000)、大上遺跡(村上 2006) 木間池北方遺跡(村上 1997a)、南野遺跡(野島 1995)、蘿屋北遺跡(岩瀬ほか編 2010)、讃良郡条里遺跡(後川・實盛・井上編 2015)、南野米崎遺跡、楠公遺跡、蘿屋遺跡等で集落跡等がみつかっている。坪井遺跡では鎌倉時代の鍛冶工房の跡とそれに伴う土壙墓がみつかっていて(野島 1996a, b)、工房跡では鍛冶炉・金床石・井戸などの施設が検出されている。

南北朝時代に四條畷付近では、四條畷の合戦が行われたとされている。南朝方の大將軍で若くして戦死した楠正行のものと、その一族の和田賢秀のものと伝わる墓があり、いざれも大阪府指定の史跡となっている。

戦国時代には、三好長慶が飯盛城を拠点に畿内・四国の一帯を支配し室町幕府の実権を握った。遺跡としての飯盛城跡はこれまでに大東市教育委員会によって調査が行われ、土塁や櫓の跡が検出されている(黒田 1989)。平成 23 年度には城跡の詳細な縄張図が測量・作成されている(村上・實盛編 2013、黒田 2013、大東市教育委員会・四條畷市教育委員会 2013)。

室町時代後期の 16 世紀中頃に讃良郡条里遺跡内の大将軍社が創建され、明治 44 年に式内社の忍陵神社に合祀されるまで地域の尊崇を集めた。発掘調査では御正軸あるいは奉納されたとみられる柴垣柳樹双鳥鏡が出土したほか、近世から近代に属する大量的の灯明皿が出土し、文献に記録されていた「百灯明」の祭りの存在が裏付けられている(後川・實盛・井上編 2015)。

(實盛良彦)

第2章 南野米崎遺跡（MN K2004－1・2005－1）調査の経過

第1節 調査の経過

南野米崎遺跡は四條畷市米崎町・塚脇町・中野一丁目・中野新町・楠公一丁目・楠公二丁目に所在し、東西約330m・南北約570mの範囲が古墳時代と中世の集落跡として周知されている。南野米崎遺跡は、生駒山系の西側斜面から西流する清瀧川と江蟬川に挟まれた扇状地性低地の西端に立地する。

当遺跡においては、過去数次の発掘調査を行ってきており、特にこの遺跡を発見するきっかけとなつたのが、今回報告する調査地区的南側約200mの所で昭和59年度に実施した四條畷市土地開発公社の住宅代替地開発工事に伴つた発掘調査である。



第3図 調査地区位置図 (MN K2004-1・2005-1)

この調査では、東西方向に長さ約 40m・幅約 5.5m・深さ約 1.7m の U 字状を呈する大溝を検出し、そこから馬下顎歯をはじめ、土師器・須恵器などの土器類、滑石製勾玉・臼玉・有孔円板、製塙土器などとともに韓式系の繩蓆文の叩きを施した須恵器壺、格子文の叩きを施した土師器平底甕・櫃などが出土している（野島 1985、1987e、1991、四條畷市教育委員会編 2004、四條畷市史編さん委員会編 2016）。その後平成 12 年度にも店舗建設に伴い調査を実施し、今回報告する発掘調査が、当遺跡内の比較的広い範囲の調査となる。

平成 16 年度の発掘調査（MNK2004-1）については、四條畷市米崎町 765 の一部において宅地造成を実施するにあたって、平成 16 年 8 月 9 日付で森本和之氏より四條畷市教育委員会に文化財保護法第 57 条の 2 第 1 項の規定により埋蔵文化財発掘の届出が提出された。その開発内容を検討・協議し、平成 16 年 8 月 17 日に遺跡の有無及び堆積土の層序を確認するために確認調査を実施したところ、遺物包含層および遺構を確認した。その成果をもとに森本氏および一級建築事務所 Be・Craft 張博氏と協議を重ねた結果、開発により遺跡が破壊される道路部分については、原因者負担で発掘調査を実施することとなった。発掘調査の面積は約 160 m²で、発掘調査の期間は平成 16 年 8 月 24 日に開始し、平成 16 年 8 月 30 日に完了した。調査の実働日数は 5 日であった（第 3 図）。

平成 17 年度の発掘調査（MNK2005-1）については、四條畷市米崎町 758-1・764-1・763において保育園建設工事を実施するにあたって、平成 17 年 1 月 19 日付で森本和之氏より四條畷市教育委員会に文化財保護法第 57 条の 2 第 1 項の規定により埋蔵文化財発掘の届出が提出された。その開発内容を検討・協議し、平成 17 年 2 月 8 日に遺跡の有無及び堆積土の層序を確認するために確認調査を実施したところ、遺物包含層および遺構を確認した。その成果をもとに森本氏及び一級建築事務所創造工房 楽太 三ツ川 和宏氏と協議を重ねた結果、開発により遺跡が破壊される建物部分については、原因者負担で発掘調査を実施することとなった。発掘調査の面積は約 630 m²で、発掘調査の期間は平成 17 年 4 月 18 日に開始し、平成 17 年 5 月 25 日に完了した。調査の実働日数は 20 日であった（第 3 図）。

（村上 始）

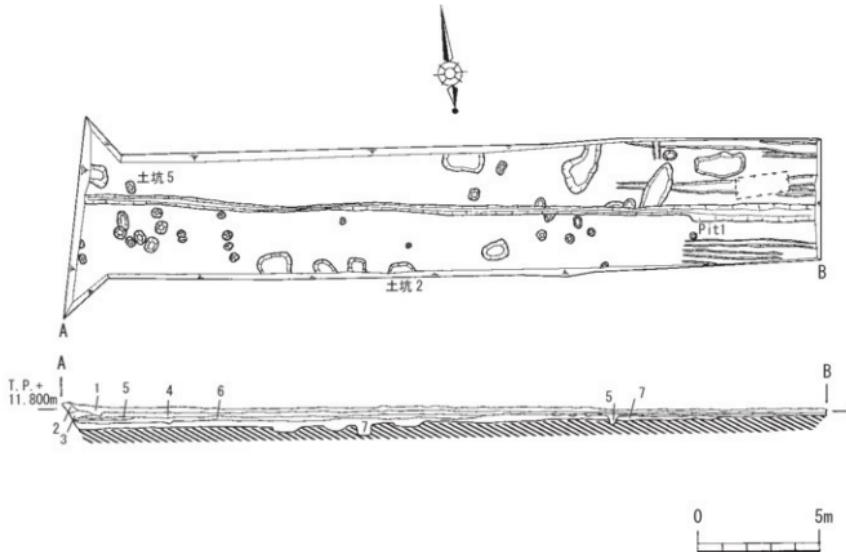
第3章 南野米崎遺跡（MN K2004-1）調査の成果

第1節 基本層序

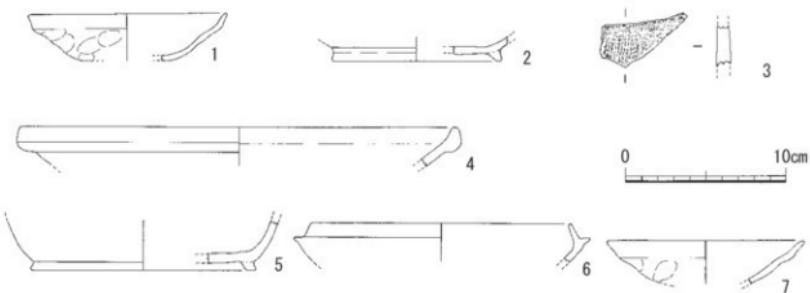
今回の発掘調査地区の現況は耕作地で、西側に南北方向に通じている市道より約30cm程度低い土地であった。約10~20cmの耕土下には、約5~20cmの床土が貼られている。その下層には部分的に近世以降の包含層と遺構（鋤溝）の埋土である灰黄色砂質土が約10cm堆積しており、その下層には、古代と中世の遺物を含む灰褐色砂質土が約10~20cm堆積している。その下層には、古墳時代後期から中世の遺物を含む暗褐色砂質土が約10~20cm堆積しており、その下層が遺構検出面であり、地山面であった。遺構面では後述するとおり、古墳時代から中世の遺構が混在する状況であった。

以下、壁面の各土層の説明を述べる（第4図）。

- 第1層：耕土
- 第2層：耕作地の畦畔
- 第3層：耕作地の畦畔斜面の盛土
- 第4層：床土
- 第5層：灰黄色砂質土（2.5Y 7/2）
- 第6層：灰黄褐色砂質土（10YR 4/2） 鉄分を含む。
- 第7層：暗褐色砂質土（10YR 3/3）



第4図 調査地区平面図・断面図（MN K2004-1）



第5図 出土遺物 (MN K2004-1)

第2節 検出遺構

今回の調査で確認した遺構は古墳時代後期から中世に属するもので、すべて同一面で検出した。この状況は、この地が幾度にもわたり生活面として利用することにより、時期の違う遺構が混在していると考える。検出した遺構は、溝9本、土坑24基、Pit16基であった。遺構面の標高は調査地区的南西隅でT.P.+11.0m、南東隅でT.P.+11.6mであった。

以下、主な遺構について記述する。(第3図)

Pit 1 平面形態は、直径が約25cm、深さが24.5cmの円形を呈する。東側上端の標高はT.P.+11.555m、西側上端はT.P.+11.547m、底部の最深部はT.P.+11.310mであった。調査地区的東側に位置する(写真図版1-2・2-1)。

須恵器杯(第5図-5)などが出土した。

土坑2 平面形態は、東西が約1.1m、深さが16.5cmの楕円形を呈するものと思われるが、約半分は調査地区外に当たるため詳細は不明である。東側上端の標高はT.P.+11.200m、西側上端はT.P.+11.172m、底部の最深部はT.P.+11.035mであった。調査地区的中央南端に位置する(写真図版2-2)。

須恵器杯身(第5図-6)などが出土した。

土坑5 平面形態は、南北が約50cm、東西が約30cm、深さが19.1cmの楕円形を呈する。北側上端の標高はT.P.+11.058m、南側上端はT.P.+11.065m、底部の最深部はT.P.+10.874mであった。調査地区的西端に位置する(写真図版2-2)。

土師器皿(第5図-7)などが出土した。

第3節 出土遺物

遺物包含層出土遺物

1 土師器皿 口径: 12.3 cm (復元)。器高: 2.9 cm (残存)。厚さ: 0.2~0.4 cm。色調: 内面は灰白色 (10YR 8/2)、外・断面は橙色 (5YR 7/6)。胎土: 密。直径1mm以下の白色粒子と赤色粒子を少量含む。焼成: 良好。残存度: 1/5。体部内面と口縁部はヨコナデ、外面の下半部はユビオサエで調整している。口縁部がやや外反し薄手であることから、Ga-2タイプのものと考える。14世紀中葉から後葉の時期に属するものと思われる。(第5図-1、写真図版9-1-1)

2 黒色土器A類碗 高台径 : 10.3 cm (復元)。器高 : 1.5 cm (残存)。高台高 : 0.5 cm。厚さ : 0.4 ~ 0.7 cm。色調 : 内面は灰色 (N 4/)、外面は橙色 (5YR 6/6)、断面は灰褐色 (5YR 4/2)。胎土 : 密。直径 1 mm 以下の白色砂粒を少量、金雲母を極少量含む。焼成 : 良好。残存度 : 小片。内外面ともに暗文などは確認できず、特に内面は摩耗のためヘラミガキ調整も不明である。畿内系III類のものと考える。10世紀後半の時期に属するものと思われる。(第5図-2、写真図版9-1-2)

3 須恵質韓式系土器 長さ : 5.3 cm (残存)。厚さ : 0.9 cm。色調 : 内・外・断面ともに灰色 (N 6/)。胎土 : 繊密。焼成 : 良好。残存度 : 小片。外面は繩蓆文のタタキ調整を施した後に幅約 2 mm の沈線を施している。おそらく古墳時代中期以降の韓式系甕の破片と思われる。(第5図-3、写真図版9-1-3)

4 東播系片口鉢 口径 : 27.2 cm (復元)。器高 : 2.4 cm (残存)。厚さ : 0.5 ~ 1 cm。色調 : 内・断面は灰白色 (N 7/)、外面は灰色 (N 5/)。胎土 : 密。直径 1 mm 以下の砂粒を少量含む。焼成 : 良好。残存度 : 小片。第II期の第2段階のものと考える。12世紀末から13世紀初頭の時期に属するものと思われる。(第5図-4、写真図版9-1-4)

Pit 1 出土遺物

5 須恵器杯B 底径 : 13.8 cm (復元)。器高 : 3.1 cm (残存)。高台高 : 0.5 cm。厚さ : 0.5 ~ 0.7 cm。色調 : 内・外・断面ともに灰白色 (10YR 8/1)。胎土 : 密。直径 1 mm 以下の白色砂粒を少量含む。焼成 : 良好。残存度 : 小片。平城宮IV期～平安京I中期のものと考える。8世紀後半から9世紀初頭の時期に属するものと思われる。(第5図-5、写真図版9-1-5)

土坑2出土遺物

6 須恵器坏身 口径 : 16.2 cm (復元)。器高 : 2.4 cm (残存)。厚さ : 0.2 ~ 0.5 cm。色調 : 内・外面は灰色 (N 5/)、断面は明赤褐色 (2.5Y 5/6)。胎土 : 密。直径 1 mm 以下の白色砂粒を少量含む。焼成 : やや不良。残存度 : 小片。II型式3段階 (TK10型式) のものと考える。6世紀後半に属するものと思われる。(第5図-6、写真図版9-1-6)

土坑5出土遺物

7 土師器皿 口径 : 12.2 cm (復元)。器高 : 2.7 cm (残存)。厚さ : 0.2 ~ 0.4 cm。色調 : 内・外・断面ともに明赤褐色 (5YR 5/6)。胎土 : 密。直径 1 mm 以下の白色粒子を少量、金雲母を多量に含む。焼成 : 良好。残存度 : 小片。体部内面と口縁部はヨコナデ、外面の下半部はユビオサエで調整している。口縁部がやや外反し薄手であることから、Ga-2タイプのものと考える。14世紀中葉から後葉の時期に属するものと思われる。(第5図-7、写真図版9-1-7)

(村上)

第4章 南野米崎遺跡（MN K2005-1）調査の成果

第1節 基本層序

今回の発掘調査地区は、南野米崎遺跡 2004-1 調査地区の北側の里道を挟んでその北側に所在する。調査地区的現況は耕作地で、里道より約 30cm 程度低い土地であった。一部を除いて約 10~20cm の耕土下には、約 5~20cm の床土が貼られている。その下層には部分的に近世以降の包含層と遺構（鋤溝）の埋土である灰白色細砂が約 10cm 堆積しており、その下層には、中世の遺物を含む灰色砂質が約 10~20cm 堆積している。その下層には、古墳時代中期から後期の遺物を含む黄灰色や褐色系の砂質土が約 10~30cm 堆積しており、その下層が遺構検出面であり、地山面であった。遺構面では後述するとおり、古墳時代から中世の遺構が混在する状況であった。

以下、壁面の各土層の説明を述べる（第6図）。

- 第1層：碎石
- 第2層：耕土
- 第3層：灰白色細砂（7.5Y 7/1）— 耕作地の畦畔斜面の盛土
- 第4層：灰色砂質土（2.5Y 7/1）
- 第5層：床土
- 第6層：灰色砂質土（7.5Y 5/1）
- 第7層：灰白色細砂（N 8/）— 近世以降の鋤溝
- 第8層：灰白色砂質土（7.5Y 7/1）
- 第9層：明黄褐色砂質土（2.5Y 7/6）
- 第10層：青灰色砂質土（5B 5/1）
- 第11層：灰黄色砂質土（2.5Y 6/2）
- 第12層：にぶい黄色砂質土（2.5Y 6/3）
- 第13層：黄灰色砂質土（2.5Y 5/1）— 地山ブロック混入
- 第14層：灰黄褐色砂質土（10YR 4/2）
- 第15層：黄灰色粗砂（2.5Y 6/1）
- 第16層：褐色砂質土（10YR 4/1）
- 第17層：明黄褐色粘質土（10YR 7/6）— 地山

第2節 検出遺構

今回の調査で確認した遺構は古墳時代中期から中世に属するもので、すべて同一面で検出した。この状況は、この地が幾度にもわたり生活面として利用することにより、時期の違う遺構が混在していると考える。検出した遺構は、溝 68 本、土坑 30 基、Pit13 基、井戸状遺構 1 基であった。遺構面の標高は調査地区的北東隅で T.P. +12.1m、南東隅で T.P. +12.0m、中央北端で T.P. +11.8m、中央南で T.P. +11.7m、北西隅で T.P. +11.2m、南西隅で T.P. +11.4m であった。この結果から遺構面は、東から西へ向かって約 45m の間でなだらかに約 70 cm 低くなっていることがわかる。

以下、主な遺構について記述する。（第6図）

土坑8 平面形態は、上端の南北が約 2.1m、東西が約 1.9m、下端の南北が約 1.7m、東西が約 1.4m、深さが 32cm の楕円形を呈する。北側上端の標高は T.P. +12.216m、南側上端は T.P. +12.199m、底部の最深部は T.P. +11.892m であった。調査地区的北東端に位置する（写真図版 3-2・4-1）。

須恵質韓式系土器甕（第8図-14）、製塩土器（第8図-15）などが出土した。

土坑9 平面形態はL字状の溝状であるが、底部が2段になっているため土坑として取り扱った。

南北方向の上端の南北が約3.9m、東西が約1.7m、下端の南北が約3.6m、東西が約1.5m、東西向の上端の南北が約2.0m、東西が約5.1m、下端の南北が約1.6m、東西が約4.7m、深さが21cmであった。西端上端の標高はT.P.+12.137m、東端上端はT.P.+12.203m、北端上端の標高はT.P.+12.175m、南端上端はT.P.+12.180m、底部の最深部はT.P.+11.989mであった。調査地区的北東端に位置し、土坑8や溝によって削平されている（写真図版3-2）。

製塙土器（第8図-16・17）、土師器高坏（第8図-18）などが出土した。

土坑12 平面形態は、上端の南北が約60cm、東西が約30cm、下端の南北が約40cm、東西が約20cm、深さが20cmの楕円形を呈する。北側上端の標高はT.P.+11.686m、南側上端はT.P.+11.688m、底部の最深部はT.P.+11.486mであった。調査地区的中央付近に位置する（写真図版3-2）。

瓦器碗（第8図-19）などが出土した。

土坑13 長さ約7.5m、最大幅約2.6mの浅く皿状に掘り窪められた溝23中に土坑15などの遺構とともに掘られている。

平面形態は、上端の南北が約2.7m、東西が約1.5m、下端の南北が約2.4cm、東西が約1.3m、深さが24.7cmの不整な楕円形を呈する。北側上端の標高はT.P.+11.807m、南側上端はT.P.+11.877m、底部の最深部はT.P.+11.714mであった。調査地区的東側に位置する（写真図版3-2・4-2）。

土師器高坏（第7図-20・21・22・23・24・25、第8図-20・21・22・23・24・25）、土師質韓式系土器（第7図-26、第8図-26）、土師器甕（第7図-27、第8図-27）、土師質韓式土器甕（第7図-28、第8図-28）、砥石（第8図-29）などが出土した。

土坑15 平面形態は、上端の南北が約43cm、東西が約33cm、下端の南北が約20cm、東西が約20cm、深さが5.8cmの楕円形を呈する。北側上端の標高はT.P.+11.919m、南側上端はT.P.+11.924m、底部の最深部はT.P.+11.866mであった。溝23の東側肩部付近に位置する（写真図版3-2）。

土師器甕（第7図-30、第8図-30）などが出土した。

溝23 平面形態は、南北方向の長さ約7.5m、東西方向の最大幅約2.6mの深さ約11.9cmに浅く皿状に掘り窪められた溝である。北側上端の標高はT.P.+12.024m、南側上端はT.P.+11.882m、底部の最深部はT.P.+11.842mであった。調査地区的東側に位置する（写真図版3-2・4-2）。

土師器高坏（第7図-31、第8図-31）、土師質韓式系甕（第7図-32、第8図-32）などが出土した。

溝24 平面形態は、東西方向の溝が西側1/3程度のところで北東へ「く」の字状に屈曲するものであった。長さは東端から屈曲部まで約9m、屈曲部から北東へ4.5m、最大幅約1.3m、深さが14.3cmであった。北東側上端の標高はT.P.+11.809m、東側上端はT.P.+12.120m、底部の最深部はT.P.+11.666mであった。調査地区的北側に位置し、溝25によって切られている（写真図版3-2）。

須恵器無蓋高坏（第6図-37、第9図-37）などが出土した。

溝25 平面形態は、南西方向から北東方向へほぼ直線的に延びるものであった。長さは約10.3m、最大幅約1.4m、深さが31.9cmであった。北東側上端の標高はT.P.+12.060m、南西側上端はT.P.+11.825m、底部の最深部はT.P.+11.657mであった。調査地区的北側に位置し、溝24を切っている（写真図版3-2・5-1）。

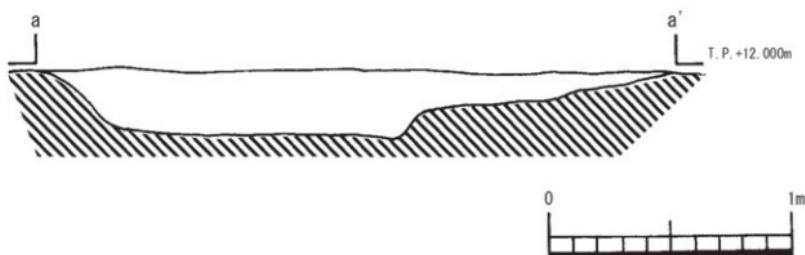
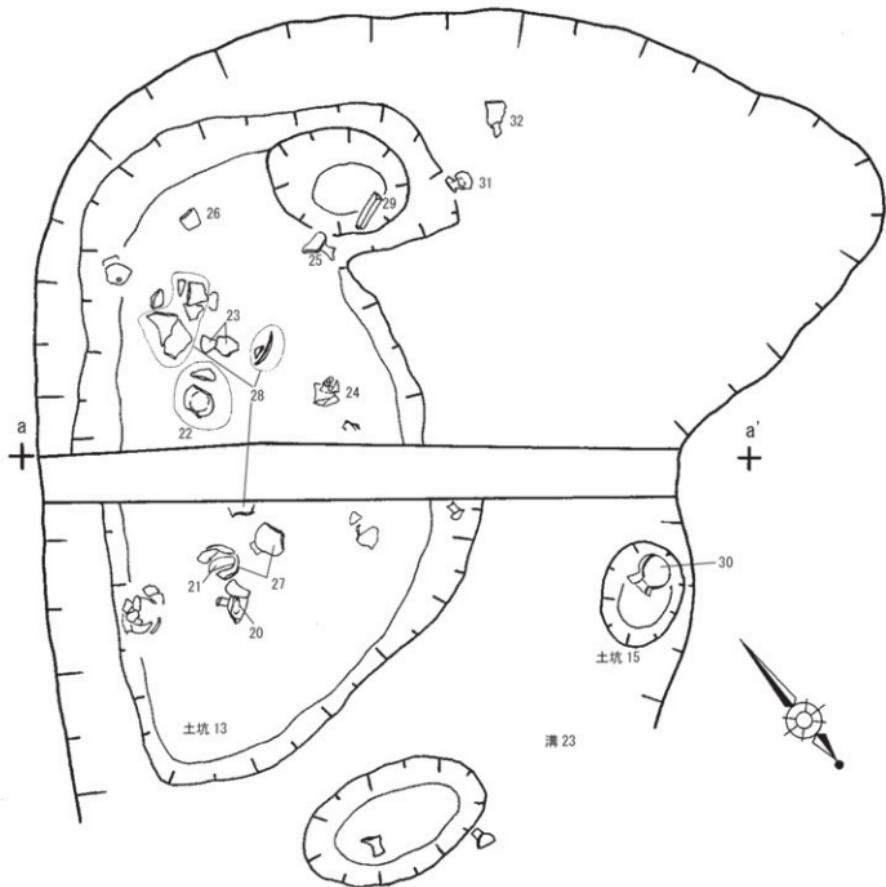
須恵質韓式系土器（第9図-33）、須恵質韓式系土器（第9図-34）、須恵器無蓋高坏（第6図-35、第9図-35）、土師器甕（第6図-36、第9図-36）などが出土した。

溝42 平面形態は、南北方向に直線的に延びるものであったが、その大半は調査地区外に当たるため詳細は不明である。長さは約3.4m、最大幅約30cm、深さが8cmであった。北側上端の標高はT.P.+11.373m、底部の最深部はT.P.+11.293mであった。調査地区的西端に位置する（写真図版5-2）。中世の動溝と考えられ、混入遺物として須恵器蓋（第9図-38）が出土した。

溝46 平面形態は、東西方向に直線的に延びるものであった。長さは約13.6m、最大幅約40cm、深さが17cmであった。西側上端の標高はT.P.+11.406m、底部の最深部はT.P.+11.236m、東側上端の標高はT.P.+11.637m、底部の最深部はT.P.+11.539mであった。調査地区的南側に位置する（写真図版5-2）。中世の動溝と考えられ、混入遺物として須恵器甕（第9図-39）が出土した。



第6図 調査地区平面図・断面図 (MN K2005-1)



第7図 遺物出土状況図・断面図 (MN K2005-1)

第3節 出土遺物

遺物包含層出土遺物

8 瓦器皿 口径：11.3 cm（復元）。器高：1.7 cm（残存）。厚さ：0.2～0.4 cm。色調：内・外面は暗灰色（N 3/）、断面は灰白色（7.5YR 8/1）。胎土：密。焼成：良好。残存度：1/3。内外面ともに摩耗のためヘラミガキなどは観察できない。（第8図-8、写真図版9-2-8）

9 滑石製有孔円板 直径：2.5 cm。厚さ：0.3～0.4 cm。孔の直径：0.1～0.3 cm。残存度：完形。穿孔開始の方向は、左右の孔がそれぞれ逆である。（第8図-9、写真図版9-2-9）

10 韩式土器碗 口径：17.3 cm（復元）。器高：3.7 cm（残存）。厚さ：0.3～0.7 cm。色調：内面は赤灰色（2.5YR 6/1）、外面は灰色（N 6/）、断面にはぶい橙色（5YR 7/3）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。外部の上半と内面は回転ナデ調整、外部の下半部はヘラケズリ調整を施している。四條畠市立学校給食センター建設に伴う鎌田遺跡の発掘調査で類似品が出土しており、碗と思われる。（第8図-10、写真図版9-2-10）

11 須恵質韓式系土器 最大の長さ：4.4 cm。厚さ：0.5～0.7 cm。色調：内面は灰色（N 6/）、外面は暗灰色（N 3/）、断面は灰赤色（10YR 5/2）。胎土：密。直径1mm以下の白色砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。外面は縄文のタタキ調整を施したあと沈線を巡らせている。（第8図-11、写真図版9-2-11）

12 須恵質韓式系土器 最大の長さ：5.5 cm。厚さ：0.9～1 cm。色調：内・外・断面ともに灰白色（N 7/）。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。外面の下半部は格子文のタタキ調整、上半部に沈線を巡らせている。（第8図-12、写真図版9-2-12）

13 須恵質韓式系土器 最大の長さ：6.8 cm。厚さ：0.4～0.5 cm。色調：内面は灰色（N 6/）、外面は暗灰色（N 3/）、断面は灰赤色（10YR 5/2）。胎土：密。直径1mm以下の白色砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。外面は縄文のタタキ調整を施したあと沈線を巡らせている。（第8図-13、写真図版9-2-13）

土坑8出土遺物

14 須恵質韓式系短径壺 口径：12 cm（復元）。器高：6 cm（残存）。厚さ：0.4～0.7 cm。色調：内・外・断面ともに灰白色（N 7/）。胎土：密。直径1mm以下の白色粒子をやや多く含む。焼成：やや不良（軟質）。残存度：小片。体部外面に平行タタキ調整が施されているが、大半が摩耗しているため不鮮明である。古墳時代中期の時期に属するものと思われる。（第8図-14、写真図版10-1-14）

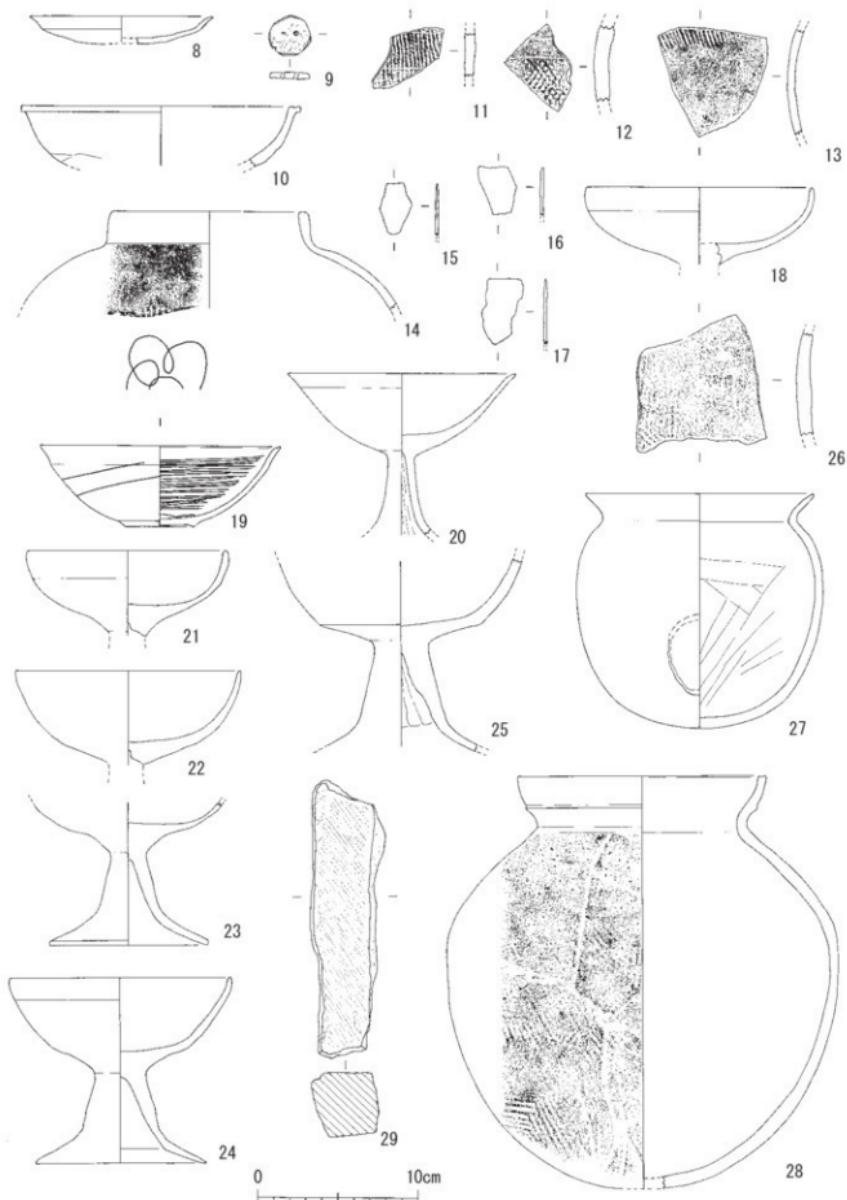
15 製塙土器 最大の長さ：3.1 cm。厚さ：0.2 cm。色調：内・外・断面ともに橙色（7.5YR 7/6）。胎土：密。焼成：良好。残存度：小片。外面にタタキ調整などは施されていない。（第8図-15、写真図版9-2-15）

土坑9出土遺物

16 製塙土器 最大の長さ：3 cm。厚さ：0.2 cm。色調：内・外・断面ともに灰白色（10YR 8/2）。胎土：粗。直径1mm以下の砂粒を多く含む。焼成：良好。残存度：小片。外面にタタキ調整などは施されていない。（第8図-16、写真図版9-2-16）

17 製塙土器 最大の長さ：4 cm。厚さ：0.2 cm。色調：内・外・断面ともに黄灰色（2.5YR 6/1）。胎土：粗。直径1mm以下の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。外面にタタキ調整などは施されていない。（第8図-17、写真図版9-2-17）

18 土師器高杯 口径：14 cm。器高：4.8 cm。厚さ：0.3～1.3 cm。色調：内面は橙色（2.5YR 6/8）、外面は橙色（2.5YR 6/6）、断面は黄灰色（7.5YR 7/8）。胎土：密。直径1～3 mmの白色砂粒と金雲母を少量含む。焼成：良好。残存度：杯部の1/3。古墳時代中期後半から後期の時期に属するものと思われる。（第4図-18、写真図版10-1-18）



第8図 出土遺物 (MN K2005-1) (1)

土坑 12 出土遺物

19 瓦器碗 口径：15 cm（復元）。器高：5 cm。厚さ：0.2～0.6 cm。色調：内・外は灰色（N 4/）、断面は灰白色（7.5Y 8/1）。胎土：密。焼成：良好。残存度：1/2。内外面ともに摩耗しているが、外面のヘラミガキは粗く、内面のヘラミガキも隙間が大きく施されている。見込み部に連結輪状暗文が施されている。大和型III-B段階で13世紀前半のものと思われる。（第8図-19、写真図版10-1-19）

土坑 13 出土遺物

20 土師器高坏 口径：14.2 cm。器高：10 cm（残存）。厚さ：0.3～1.1 cm。色調：内・外・断面ともに浅黄橙色（7.5YR 8/6）。胎土：密。直径1～3 mmの白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：坏部1/2。古墳時代中期後半から後期前半の時期に属するものと思われる。（第8図-20、写真図版10-1-20）

21 土師器高坏 口径：12.4 cm。器高：5.3 cm（残存）。厚さ：0.3～1.9 cm。色調：内・外・断面ともに橙色（2.5YR 6/8）。胎土：密。直径1～3 mmの白色砂粒と金雲母を少量含む。焼成：良好。残存度：坏部のみ完形。古墳時代中期後半から後期の時期に属するものと思われる。（第8図-21、写真図版10-1-21）

22 土師器高坏 口径：14 cm。器高：5.8 cm（残存）。厚さ：0.3～1.4 cm。色調：内・外・断面ともに橙色（5YR 7/8）。胎土：密。焼成：良好。残存度：坏部のみ4/5。古墳時代中期後半から後期の時期に属するものと思われる。（第8図-22、写真図版10-1-22）

23 土師器高坏 底径：9.8 cm（復元）。器高：8.8 cm（残存）。厚さ：0.2～2.3 cm。色調：内・外・断面ともに橙色（5YR 7/8）。胎土：密。直径1 mm以下の白色砂粒少量含む。焼成：良好。残存度：坏部1/3・脚部1/2。古墳時代中期後半から後期の時期に属するものと思われる。（第8図-23、写真図版10-1-23）

24 土師器高坏 口径：13.8 cm（復元）。底径：10.6 cm（復元）。器高：6.6 cm。厚さ：0.3～1.6 cm。色調：内・外・断面ともに橙色（5YR 6/8）。胎土：密。直径1～2 mmの白色砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：1/3。古墳時代中期後半から後期の時期に属するものと思われる。（第8図-24、写真図版10-1-24）

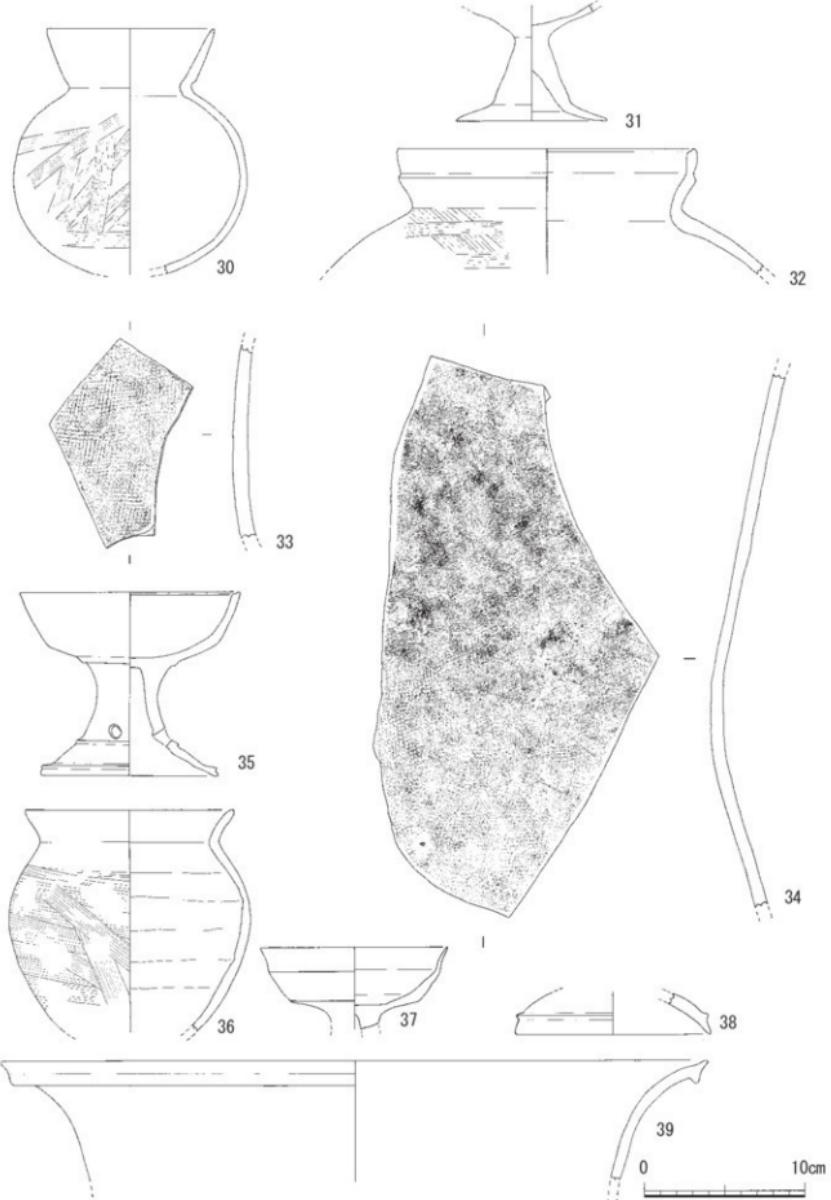
25 土師器高坏 器高：11.5 cm（残存）。厚さ：0.5～1.6 cm。色調：内・外・断面ともに明褐色（5YR 5/6）。胎土：やや粗。直径1 mm以下の白色粒子と金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/3。古墳時代中期後半から後期の時期に属するものと思われる。（第8図-25、写真図版10-1-25）

26 土師質韓式系土器 最大の長さ：8.6 cm。厚さ：0.7～0.9 cm。色調：内面は黄灰色（2.5Y 5/1）、外面の一部は灰白色（2.5Y 8/2）で他は黒色（N 2/）、断面の内側は黄灰色（2.5Y 5/1）で外側は黒色（N 2/）。胎土：粗。直径1 mm以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。外面は格子文のタタキ調整を施している。（第8図-26、写真図版9-2-26）

27 土師器甕 口径：14.2 cm（復元）。器高：14.5 cm。厚さ：0.3～0.7 cm。色調：内面は黒褐色（2.5Y 3/1）、外・断面は浅黄橙色（10YR 8/3）。胎土：密。直径1～2 mmの白色粒子をやや多く、金雲母を少量含む。焼成：良好。残存度：2/3。外面の調整は摩耗のため不明。内面は板状工具によるナデ調整が施されている。体部下半部に直径4 cm程度の穿孔跡が見られる。古墳時代中期の時期に属するものと思われる。（第8図-27、写真図版10-1-27）

28 土師質韓式系甕 口径：15.4 cm（復元）。器高：25.6 cm（復元）。厚さ：0.5～0.9 cm。色調：内・外・断面ともに黄橙色（7.5YR 7/8）。胎土：やや粗。直径1～2 mmの白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/4。口縁部下に低い稜線を持ち、外面は平行タタキ調整を施している。古墳時代中期の時期に属するものと思われる。（第8図-28、写真図版10-1-28）

29 砥石 長さ：17.3 cm。最大幅：4 cm。最大厚：3.9 cm。四面のうち一面のみを砥石として使用している。（第8図-29、写真図版10-1-29）



第9図 出土遺物 (MN K2005-1) (2)

土坑 15 出土遺物

30 土師器壺 口径：10.4 cm。器高：15.2 cm（残存）。厚さ：0.3～0.7 cm。色調：内・外・断面ともに浅黄橙色（10YR 8/4）。胎土：やや粗。直径1～3 mmの白色砂粒と金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：2/3。体部外面は摩耗のため不鮮明であるがハケメ調整が施されている。古墳時代中期の時期に属するものと思われる。（第9図-30、写真図版 10-2-30）

溝 23 出土遺物

31 土師器高杯 底径：9.4 cm（復元）。器高：7.2 cm（残存）。厚さ：0.3～2.8 cm。色調：内・外・断面ともに橙色（5YR 7/8）。胎土：やや粗。直径1～3 mmの白色砂粒を多く含む。焼成：良好。残存度：2/3。古墳時代後期の時期に属するものと思われる。（第9図-31、写真図版 10-2-31）

32 土師器甕 口径：18.4 cm（復元）。器高：7.8 cm（残存）。厚さ：0.5～1 cm。色調：内面は灰白色（2.5YR 8/2）、外面はにぶい橙色（7.5YR 7/4）、断面は灰色（5YR 4/1）。胎土：密。直径1～2 mmの白色砂粒と金雲母を少量含む。焼成：やや不良。残存度：小片。口縁部下に低い稜線を持ち、外面はハケメ調整を施している。古墳時代中期の時期に属するものと思われる。（第8図-32、写真図版 10-2-32）

溝 24 出土遺物

37 須恵器無蓋高杯 口径：11.6 cm（復元）。器高：5 cm（残存）。厚さ：0.1～1.2 cm。色調：内面は橙色（5YR 6/8）、外面は橙色（5YR 7/6）、断面は浅黄橙色（7.5YR 8/6）。胎土：緻密。焼成：不良。残存度：2/3。脚部の三方向に台形と思われる透かしが見られる。器形や胎土から焼成不良の須恵器と考える。II型式1段階（MT15型式）。6世紀前半の時期に属するものと思われる。（第9図-37、写真図版 10-2-37）

溝 25 出土遺物

33 須恵質韓式系土器 最大の長さ：12.9 cm。厚さ：0.8～1 cm。色調：内面は暗灰色（N 3/）、外面は灰色（N 6/）、断面は灰赤色（10R 5/2）。胎土：緻密。直径1 mm以下の黒色粒子を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。外面は格子文のタタキ調整を施している。（第9図-33、写真図版 10-2-33）

34 須恵質韓式系土器 最大の長さ：34.8 cm。厚さ：0.6～0.9 cm。色調：内面は灰色（N 6/）、外面は暗灰色（N 3/）、断面の中心部は灰赤色（10R 5/2）、両外側は灰白色（N 8/）。胎土：緻密。焼成：やや不良。残存度：小片。外面は格子文のタタキ調整を施している。（第9図-34、写真図版 10-2-34）

35 土師器無蓋高杯 口径：13.7 cm。器高：11.4 cm。厚さ：0.3～1.6 cm。色調：内・外・断面ともに黄橙色（10YR 8/6）。胎土：粗。直径1～3 mmの白色・黒色・褐色砂粒を非常に多く含む。焼成：良好。残存度：ほぼ完形。脚部の三方向に円孔が開けられている。器形は須恵器無蓋高杯そのものであるが、他の須恵器と比べると胎土が非常に粗く土師器に似ている点や内外面とともにナデ調整を施している点などから、須恵器を真似て作成した土師器ではないかと考える。須恵器の編年に照らすとI型式3～4段階（TK208～TK23型式）。5世紀中頃の時期に属するものと思われる。（第9図-35、写真図版 10-2-35）

36 土師器甕 口径：13 cm（復元）。器高：13.7 cm（残存）。厚さ：0.4～0.6 cm。色調：内・外・断面ともににぶい黄橙色（10YR 7/4）。胎土：密。直径1～2 mmの白色砂粒をやや多く、金雲母を少量含む。焼成：良好。残存度：1/4。外面はハケメ調整を施している。古墳時代中期の時期に属するものと思われる。（第9図-36、写真図版 10-2-36）

溝 42 出土遺物

38 須恵器蓋 口径：12.2 cm（復元）。器高：2.7 cm（残存）。厚さ：0.3～0.8 cm。色調：内・外・断面ともに灰色（N 6/）、断面は灰赤色（10YR 5/2）。胎土：密。直径1 mm以下の白色砂粒を少量含む。焼成：

成：良好。残存度：小片。I型式1段階（TK73型式）。5世紀前半の時期に属するものと思われる。（第9図-33、写真図版10-2-38）

溝46 出土遺物

39 須恵器甕 口径：44cm（復元）。器高：7.5cm（残存）。厚さ：0.2～0.7cm。色調：内面は灰白色（N7/）、外面は灰色（N4/）、断面は灰赤色（10R5/2）。胎土：緻密。直径1mm以下の白色砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。I型式1段階（TK73型式）。5世紀前半の時期に属するものと思われる。（第9図-39、写真図版10-2-39）

（村上）

第5章 南野米崎遺跡（MN K2004-1・2005-1）調査のまとめ

第1節 調査のまとめ

今回報告する2か所の発掘調査場所は、南野米崎遺跡の北西端に位置している。今回の調査で確認した遺構は、古墳時代中期から後期に属するものと平安時代に属するものと中世に属するものであつた。これら時代の違う遺構が同一面で検出されることは、前述したとおりこの地が幾年にもわたり生活場所として利用されることにより造成が繰り返されてきて、近世以降は農地として大きく造成されてきたことに起因するものと考える。これに関しては、周辺地域の調査でも同じような状況が多くみられている。

2004-1の調査においては、平安時代のPitを検出した。しかし、調査範囲が狭かったため具体的な掘立柱建物の復元には至らなかった。これまでのところこの遺跡において、平安時代の集落跡に関連する遺構を多くは確認していないが、隣接する中野遺跡においては井戸など集落跡に関連する遺構を多く確認し、集落が営まれていたことが判明していることから、この地域にも集落が広がっていたことを示唆する遺構であると考える。

2005-1の調査においては、調査地区的北東側に古墳時代中期から後期の遺構が集中して検出した。特に土坑13からは、他の遺構と比較すると土師器高壺が集中して出土していることや胴部を穿孔した土師器甕が出土していることから、祭祀など特異な性格の遺構である可能性も考えられる。

また、今回の調査では遺物包含層も含めて韓式系土器や製塩土器が多く出土した。市内では古墳時代中期から後期にかけて、朝鮮半島と係わりの深い馬銅の集落が広い地域で営まれていたことが過去の様々な発掘調査結果から判明している。第1章の遺跡の位置と歴史的環境でも述べたとおり、今回の調査地区から南へ約200mのところにおいて古墳時代の大溝を検出し、溝内から馬の下顎骨とともに陶質土器や韓式系土器など渡来系関連の遺物が多く出土していることから、馬銅に関連する集落であったことが分かっている。今回の調査では馬の骨などは出土しなかつたが、出土遺物から同じように渡来系に関連する集落の一部に当たるものと考える。

また中世の遺構への混入資料ではあるが、5世紀前半のI型式1段階（TK73型式）の初期須恵器が出土している。このことは、この周辺においてこれらの時期の集落が営まれていた可能性を示唆する資料であると考える。

（村上）

第6章 岡山南遺跡（OM2015-1）調査の経過

第1節 調査の経過

岡山南遺跡は、四條畷市大字岡山・岡山東1丁目を中心に広がる、旧石器時代・縄文時代・古墳時代・平安時代・中世の集落跡である。この遺跡は1975年の府道枚方富田林泉佐野線新設バイパス建設工事中に発見された遺跡で、その後1976年10月にかけて同工事に伴い3次にわたって発掘調査を行った（野島・藤原・花田 1976）。1次調査は確認調査で、古墳時代～中世にわたる遺跡を確認した。2次調査では古墳時代の掘立柱建物や堅穴建物を検出し、堅穴建物内を中心に多くの遺物が出土した。3次調査では古代～中世の掘立柱建物を複数検出した。これらの掘立柱建物の柱穴からは皇朝十二錢の乾元大宝が出土した。この遺構面の下層からは古墳時代の大溝2本（大溝A・B）、井戸1基等を検出した。この大溝のうち大溝Bからは、土器類とともに家形埴輪や蓋形埴輪、動物形埴輪などの形象埴輪や朝顔形埴輪、円筒埴輪などが多数出土した。また、これらの遺物とともに縄文土器や石鏟・磨製石斧、後期旧石器時代後半の木葉形搶先形尖頭器も出土した。

1976年11月には4次調査として大阪瓦斯天然ガス管理設工事に伴い発掘調査を行い、3次調査の大溝Bが逆S字形に蛇行する溝であることが分かった（野島 1979、1982）。この溝は埴輪を出土しながら古墳の周溝ではないことがわかり、集落内を区画する溝の可能性が考えられている（野島 1982）。また大溝B内からは、円筒埴輪や土器類とともに木製下駄が出土した（野島 1979）。この下駄は左足用のもので、伴出遺物から古墳時代中期のものであり、他例と比較しても極めて古い出土例である（野島 1979、瀬川 1992、本村 2006）。

1981年2～4月には5次調査として四條畷市開発公社の委託で調査を実施し、古代～中世の集落跡と古墳時代中期の集落跡を検出した（野島 1982）。古代～中世の遺構面では中世の掘立柱建物や平安時代の板枠井戸などを検出し、井戸内からは「田内急」と墨書きされた黒色土器などが出土した。古墳時代中期の遺構面では数多くの円筒埴輪や形象埴輪が出土し、掘立柱建物を検出した（野島 1982）。掘立柱建物周辺からは馬齒が出土した（野島・前田 1984）。この調査箇所は大溝Bに西接する場所に当たり、この点からも大溝Bは集落内を区画する溝とみられる（野島 1987b）。

1981年7月からは6次調査として宅地開発に伴い発掘調査を行い、3次調査の2本の大溝の続きを、掘立柱建物を検出した（野島 1982）。大溝Aでは最下層から縄文時代晚期の土器や石器類が出土した。

1983年には忍ヶ丘ハイツ建設に伴い7次調査を行い、古墳時代後期の溝、鎌倉時代末の掘立柱建物、室町時代の落込を検出した（野島・前田 1984）。古墳時代後期の溝からは土器類や埴輪類、鐵鏟、勾玉のはか円孔が穿たれ垂下可能な砥石が出土した。

1986年には民間社宅建設に伴い8次調査を行い、古墳時代中期の掘立柱建物、平安時代の掘立柱建物、方形板枠井戸、中世の掘立柱建物、溝などを検出した（野島 1987b）。特に平安時代の井戸からは「高田宅」「福万宅」の墨書きがある黒色土器3点などが出土した。この調査地では1992年にも追加で調査を行い、堅穴建物や井戸、掘立柱建物など集落の続きや方墳状にめぐる溝などを検出した。

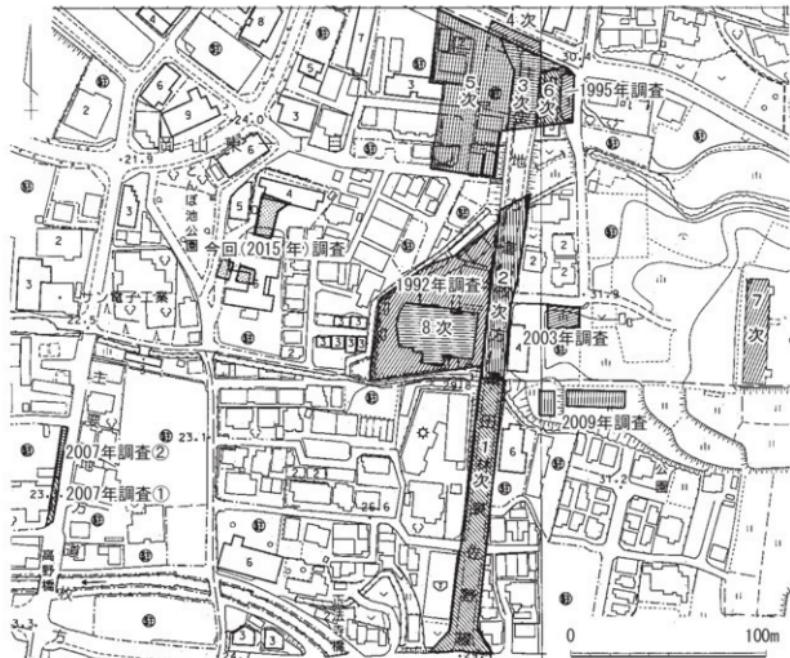
1995年にはマンション建設に伴い調査を行い、中世の掘立柱建物や素掘井戸などを検出した。2003年の駐車場造成に伴う調査では中世の井戸等を検出した（村上 2004）。2007年には道路拡幅工事に伴い2度にわたって調査を行い、中世の集落跡と畑地遺構を検出した（村上・實盛 2013a）。2009年には民間宅地造成に伴い調査を行い、掘立柱建物など中世の集落を検出した。

四條畷市岡山東1丁目76番、79番の一部及び里道水路敷において宅地開発工事が計画され、平成27（2015）年1月29日に設計者のアルファ・プランニング米屋治郎氏から四條畷市都市整備部都市計画課を経由して大阪府住宅まちづくり部建築指導室長へ、都市計画法第29条の規定による開発許可についての協議申出があり、同課から同年1月29日付暖都都第1488号で四條畷市教育委員会教育部地域教育課へ、四條畷市開発指導要綱第5条の規定に基づく事前協議書の送付があった。この場所は周知遺跡である岡山南遺跡の範囲内であったため、同年1月29日付暖教地第1803号で、文化財保護法第93条第1項の規定に基づく届出と確認調査が必要な旨の意見を回答した。同年2月9日付で、フジ

住宅株式会社代表取締役宮協宣綱氏から四條畷市教育委員会を経由し大阪府教育委員会へ文化財保護法第93条第1項の規定により「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。大阪府教育委員会からは同年2月23日付教委文第1-5458号で通知があり、発掘調査が必要との指導があった。

平成27年3月16日に、開発地域内に5か所のトレンチを設定し確認調査を実施した結果、開発以前に存在していた建物により遺跡は破壊されていたが、建物の存在しなかった部分において、中世と古墳時代の包含層および遺構面を確認した。その結果をもって開発者と協議を行い、残存していた遺跡が開発工事によって破壊される、道路予定地のうち旧建物が存在しなかった部分の発掘調査を実施することとなった。同年3月24日に開発者から発掘調査承諾書の提出があり、同年3月31日付畷教地第2114号で、文化財保護法第99条第1項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘調査の報告」を行った。調査地区は3か所あり、北の最も大きな地区を1地区、南の2か所のうち東側を2地区、西側を3地区とした。各地区的規模は、1地区が東西最大約15m、南北約22m、2地区が東西約7.8m、南北約7.5m、3地区が東西約7m、南北約9m。調査面積合計約427m²で、調査期間は平成27年4月6日から同年5月27日までであった。調査は確認調査の結果から、掻乱土、盛土、耕土と床土をバックホーで掘削し、それ以下は遺構面の検出に努めながら人力での掘削を行った。検出した遺構の測量は、トータルステーション（トプコン IS-305）を用い株式会社島田組の堀場集理が担当した。

調査で出土した遺物については、平成27年5月28日付畷教地第362号で四條畷警察署長に埋蔵文化財発見届出書を提出し、同年6月1日に第1146号で受理された。大阪府教育委員会には同年5月28日付畷教地第363号で埋蔵文化財保管証を提出し、同年7月13日付教委文第3-60号で埋蔵文化財の認定があった。出土遺物の総量は遺物収納用コンテナ換算で計10箱であった。
(實盛)



第10図 調査地区位置図(OM2015-1)

第7章 岡山南遺跡（OM2015-1）調査の成果

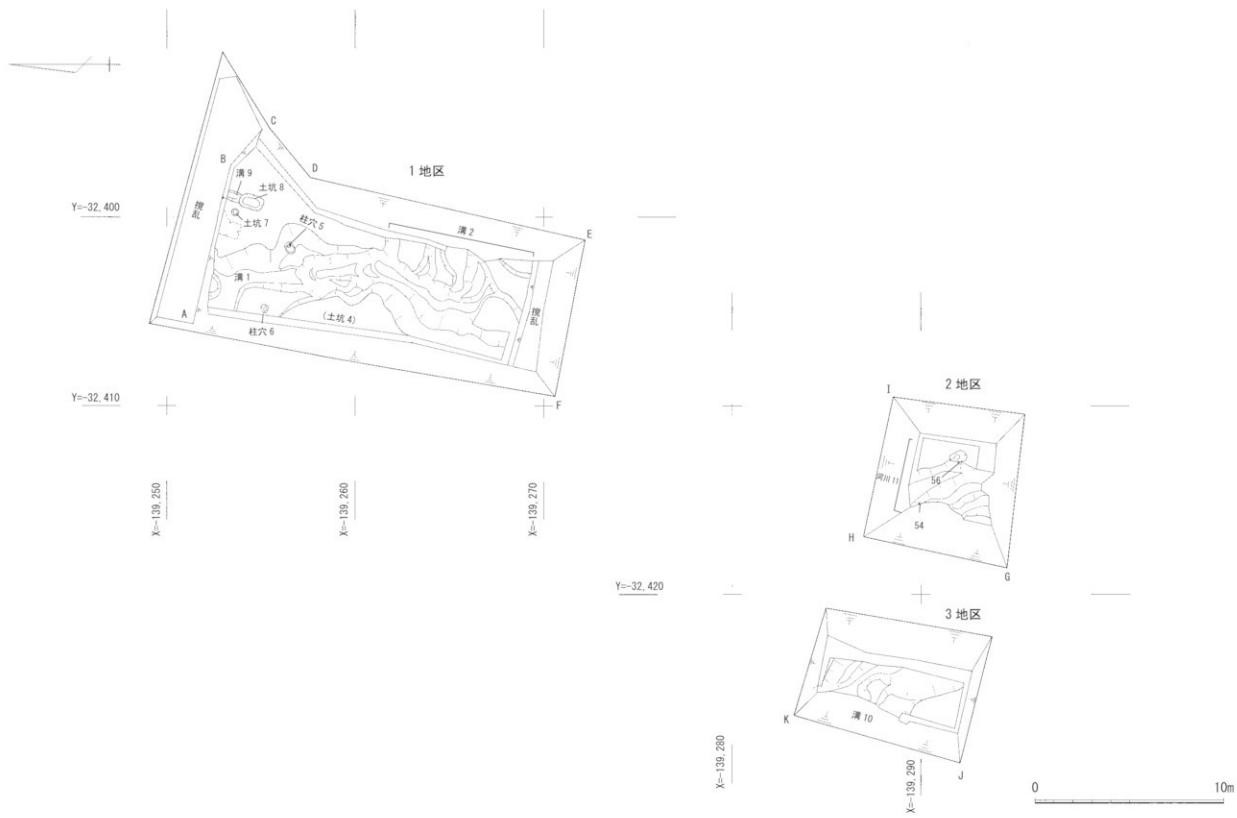
第1節 基本層序

今回の発掘調査地区は、調査前には民間の社員寮が建っていた。1地区の北半は旧地形が高くなつてあり、そこに0.3mほど盛土されていた。南半は、おおよそ里道敷が存在した部分に旧耕作地の段差があり、その段差をなくし北半との行き来がスムーズになるよう最大約1.3m盛土されていた。里道敷部分には杭列を伴う近世の溝が存在し、区画されており、その下層は古墳時代～中世の遺構面であった。1地区北半では包含層がほとんど残存せず、盛土を取り除くとすぐに古墳時代～中世の遺構面を検出した。旧建物が存在した箇所は遺跡が大きく擾乱されており、その箇所に近接した2地区では地表下約1.4mは擾乱された土層であった。3地区では盛土直下に旧耕土は存在せず、すぐに中世から近世の遺物包含層が堆積していた。

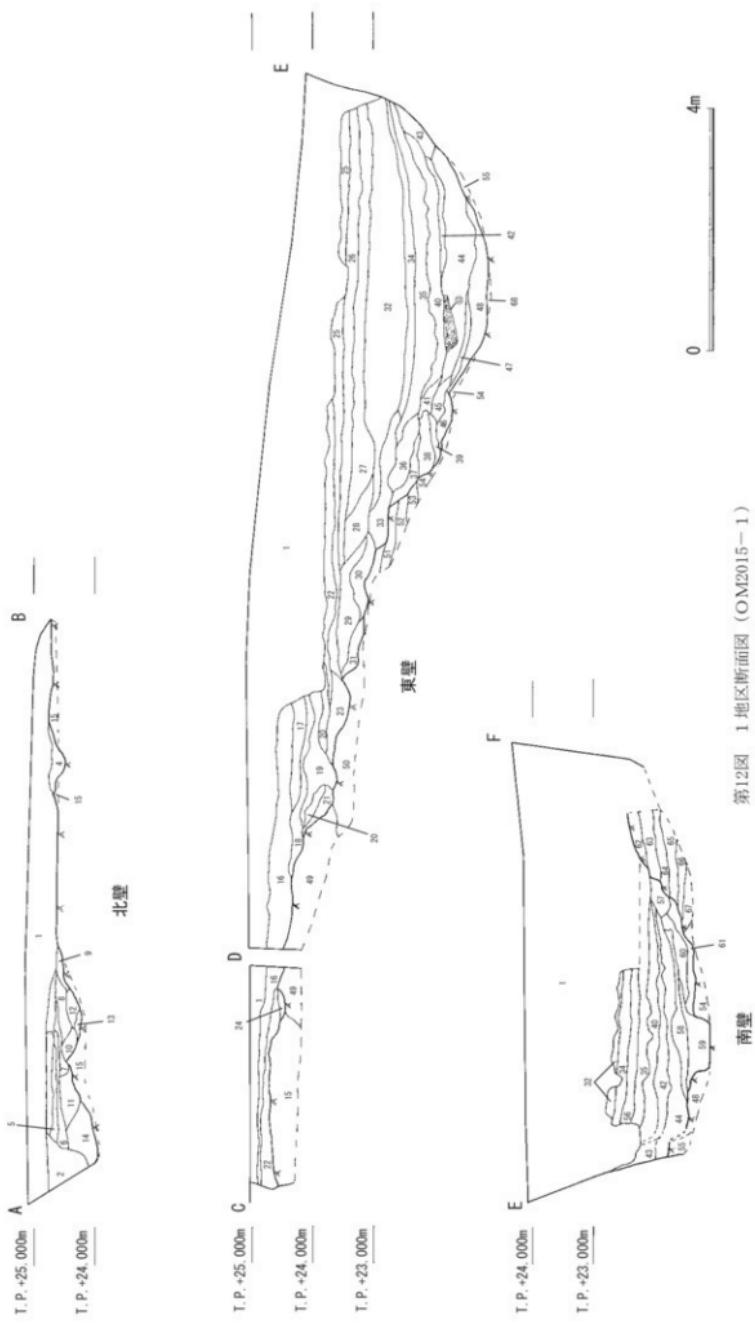
以下、各土層の説明を述べる。

1 地区断面（第12図）

1 盛土	31 10YR3/2 黒褐色砂質土 濁2上層埋土
2 梶乱土（ブロック） 近世～近代	32 2.5Y2/1 黒色中砂混粘質土 濁2中層埋土
3 2.5Y5/4 黄褐色砂質土 中世耕作土	33 2.5Y4/1 黄灰色中砂と粘質土のブロック 濁2中層埋土
4 10YR5/2 灰黄褐色中砂混シルト 濁9埋土	20 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂質土
5 10YR5/3 にぶい黄褐色中砂混シルト 濁1上層埋土	近世～近代水田閑連遺構埋土
6 10YR5/6 黄褐色砂質土 濁1上層埋土	27 10YR3/3 暗褐色砂質土 濁2上層埋土
7 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土 濁1上層埋土	32 2.5Y2/1 黒色中砂混粘質土 濁2中層埋土
8 10YR2/1 黒色砂質土 土器含む 濁1中層埋土	34 2.5Y4/2 暗灰黄色中砂混シルト 濁2中層埋土
9 2.5Y5/3 黄褐色砂質土 濁1中層埋土	35 7.5Y2/1 黒色細砂混シルト 濁2中層埋土
10 10YR4/4 褐色砂質土 濁1中層埋土	36 7.5Y5/1 灰色中砂 濁2中層埋土
11 7.5Y3/3 暗褐色砂質土 濁理土	37 10YR4/1 暗灰色粘土 一部中砂混 濁2中層埋土
12 10YR3/2 黑褐色砂質土 濁1下層埋土	39 2.5GY5/1 オリーブ灰色中砂混シルト 一部ブロック状 濁2中層埋土
13 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土と12層の混質土 濁1下層埋土	38 2.5Y6/4 にぶい黄色中砂 一部細砂混 濁2中層埋土
14 10YR3/2 黑褐色砂質土 土器混 濁1下層埋土	40 10YR2/1 黑色粘土 一部細砂混 濁2中層埋土
15 2.5Y6/2 灰黄色中砂混シルト 地山	41 10YR2/2 黑褐色砂質土 濁2中層埋土
16 5Y3/1 オリーブ黒色砂質土 旧耕土	42 2.5Y6/3 にぶい黄色中砂 濁2中層埋土
17 2.5Y6/6 明黄褐色羅混じり土	43 2.5Y3/1 黑褐色砂質土 濁2中層埋土
18 2.5Y5/4 黄褐色砂質土	44 10YR2/1 黑色中砂混粘土 濁2下層埋土
19 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質土 近世～近代水田閑連遺構埋土	45 2.5Y5/2 暗灰黄色砂質土 濁2下層埋土
21 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質土 近世～近代水田閑連遺構埋土	46 2.5Y4/2 暗灰黄色中砂（粘土ブロック混） 濁2下層埋土
22 5Y5/2 灰オリーブ色中砂混シルト 床土	47 2.5Y5/3 黄褐色中砂 濁2下層埋土
23 2.5Y4/1 黄灰色砂質土 中～近世遺構埋土	48 2.5Y4/3 オリーブ褐色中砂混シルト 濁2下層埋土
24 10YR4/4 にぶい黄褐色砂質土 遺構埋土	49 2.5Y5/4 黄褐色中砂混シルト 地山
25 10YR4/4 褐色砂質土 古墳時代～後期包含層	50 10YR6/4 にぶい黄褐色中砂混シルト 所々水性還元により7.5Y4/1灰色 地山
26 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土 濁2上層埋土	51 2.5Y4/1 黄灰色粘土 地山
28 10YR3/2 黑褐色砂質土 濁2上層埋土	52 5Y5/1 灰色中砂 地山
29 5Y5/2 灰オリーブシルト混中砂 濁2上層埋土	53 2.5GY6/1 オリーブ灰色シルト 地山
30 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト 濁2上層埋土	54 5Y5/1 灰色粗砂 糯混 地山
	55 10GY6/1 緑灰色中砂混シルト 地山



第11図 調査地区平面図 (OM2015-1)



第12圖 1 地區斷面圖 (OM2015-1)

56	2.5Y3/2	黒褐色砂質土	溝2中層埋土	63	2.5Y4/1	黄灰色シルト混中砂	地山
57	2.5Y2/1	黒色砂質土	溝2中層埋土	64	N3/0	暗灰色粘土	地山
58	2.5Y7/3	浅黄色粗砂	溝2下層埋土	65	5Y4/1	灰色中砂とシルトの互層	地山
59	5Y2/1	黑色粘土	溝2下層埋土	66	5Y2/1	黑色粘質土	地山
60	5Y3/2	オリーブ黒色粗砂混シルト	溝2下層埋土	67	5Y3/1	オリーブ黒色中砂とシルトの互層	地山
61	5Y3/1	オリーブ黒色中砂混シルト	溝2下層埋土	68	N2/0	黑色粘土	地山
62	N3/0	黑色粘土	地山				

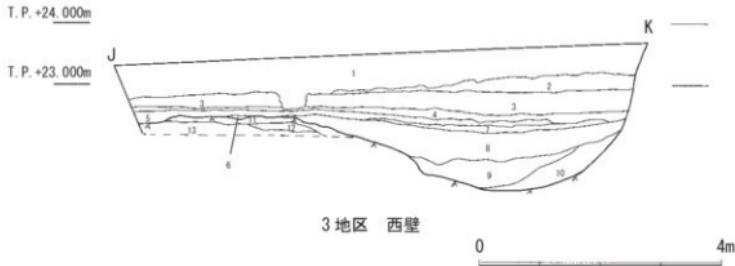
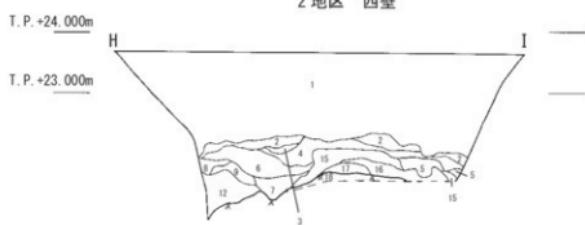
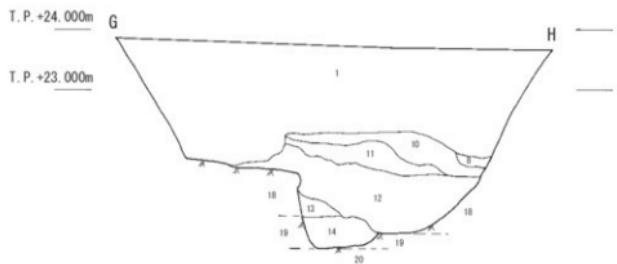
2 地区断面 (第13図)

- 1 盛土・擾乱土
- 2 5Y4/2 灰オリーブ色シルト 河川11埋土
- 3 5Y6/1 灰色中砂 河川11埋土
- 4 2.5Y2/1 黒色中砂混砂質土 河川11埋土
- 5 5Y4/1 灰色中砂混シルト 河川11埋土
- 6 2.5Y5/2 喷灰黄色中砂 河川11埋土
- 7 10YR5/2 灰黃褐色粗砂 河川11埋土
- 8 2.5Y4/1 黄灰色シルト 河川11埋土
- 9 2.5Y2/1 黑褐色粘土 河川11埋土
- 10 2.5Y6/2 黄灰色中砂 河川11埋土
- 11 2.5Y3/1 黑褐色シルト 河川11埋土
- 12 10Y6/2 灰黃褐色中砂 河川11埋土(中～下層)
- 13 10YR4/1 暗褐色シルト 河川11埋土
- 14 5Y6/1 灰色粗砂 糜混 河川11最下層埋土
- 15 7.5Y3/1 オリーブ黒色中砂混シルト
地山(河川11肩盛土)
- 16 7.5Y4/1 灰色粘質シルト 地山(河川11肩盛土)
- 17 5Y3/1 オリーブ黒色中砂混シルト
地山(河川11肩盛土)
- 18 2.5GY5/1 オリーブ灰色シルト 地山
- 19 2.5Y2/1 黑色粘土 地山
- 20 7.5GY5/1 緑灰色シルト 地山

3 地区断面 (第13図)

- 1 盛土・擾乱土
- 2 7.5YR5/4 にぶい褐色砂質土 包含層
- 3 7.5YR3/3 暗褐色砂質土 包含層
- 4 10YR4/1 暗褐色中砂混粘質土 包含層
- 5 2.5Y5/3 黄褐色細砂混シルト 包含層
- 6 10YR3/3 暗褐色砂質土 遺構埋土
- 7 2.5Y4/1 黄灰色中砂混シルト 溝10埋土
- 8 2.5Y3/1 黑褐色中砂混シルト 溝10埋土
- 9 2.5Y2/1 黑色粘質土 木質多く混じる 溝10埋土
- 10 7.5Y4/1 灰色中砂混シルト 木質混 溝10埋土
- 11 5Y5/2 灰オリーブ色シルト 地山
- 12 2.5Y5/3 黄褐色粗砂 糜混 地山
- 13 7.5Y3/1 オリーブ黒色粘質シルト 地山

(實盛)



第13図 2・3地区断面図 (OM2015-1)

第2節 検出遺構

今回の調査で確認した遺構は、古墳時代から中世にかけての遺構で、3地区合計で10基の遺構があり、遺構の種類としては溝、土坑、柱穴、河川があった（第11図）。遺構面の標高は1地区北隅でT.P.+24.577m、一段低くなった南西部でT.P.+23.228m、3地区北東部でT.P.+22.394m、南西部でT.P.+22.372mであった。2地区では地表下約1.4mが攪乱されていたため遺構面上面が攪乱されていて、T.P.+22.250mでようやく河川11理土を検出した。溝1、2、10、河川11は古墳時代の遺構で、それ以外は中世～近世に属する。河川11の最下層は縄文時代に堆積している。なお遺構の番号は、遺構の認識が変わった際の記録上の混乱を防止するため、遺構の種類に関係なく検出順に通し番号でつけた。遺構番号3は溝2と同一の遺構と調査途中で判断したため欠番である。河川11については、調査時は溝10と同一の遺構と認識していたが、調査中から埋土が全く異なることが注目され、平面図作成の結果流水方向も異なることが判明したので別遺構であることがわかり、調査後に遺構番号を分けたものである。

各調査区とも、遺構面は1面のみ検出した。1地区の遺構面は、北半は一段高くなつたように存在していて、地山の状況から旧地形が北から南へと下がつていているのを確認した。この北半は盛土・攪乱土を取り去ると、一部近世の包含層が堆積した部分を除きほとんどすぐに遺構面となっており、旧地形が削平されている状況であった。このため、この調査区で検出した古墳時代前期の遺構と中世の遺構は同一遺構面で検出された。北半と南半の境目部分には旧里道敷が存在し、里道敷部分には杭列を伴う近世の溝が存在し、区画されており、その下層は古墳時代～中世の遺構面であった。1地区南半は中世～古墳時代に属する遺物包含層が存在し、それを除去するとその下層に溝2内の古墳時代堆積層を検出した。

2地区は上記のとおり地表下約1.4mが攪乱されていたため遺構面上面は攪乱されていて、また調査区全面が河川内にあたっていたこともあり、明確な遺構面の検出には至らなかった。攪乱土を除去し人力掘削を始めた層位はすでに河川内にあたっていて、砂層とシルト層が堆積している状況であった。

3地区は盛土直下にすぐに中世から近世の遺物包含層が堆積していた。それらを除去すると、古墳時代の遺構面と溝10を検出した。

1. 古墳時代の遺構

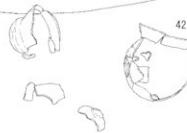
溝1 1地区の北半で検出した。北西から南へと流れる溝で、南端は溝2に合流しており、北端は調査地区外に続くが、旧建物により攪乱されている。北端部分は下端のみ二股状に分かれていたのが調査区内に入つてすぐ合流している。検出できた規模は長さ約9.8m、北端部分の幅4.1m、溝2に合流する南端部分の幅2.35m、深さは北端部分で0.519m、南端部分で1.26mである。標高は北端部分の東側上端がT.P.+24.553m、底部がT.P.+24.034mで、南端部分の西側上端はT.P.+23.294m、東側上端はT.P.+23.510m、その付近に位置する底部はT.P.+22.250m、南端から溝2内へと西に蛇行しながら流れ込み、溝2の下端に合流した個所の最底部はT.P.+21.118mであった（第11図・写真図版1・写真図版6-1）。

X=139253～139258にかけて、Y=32403を中心南北3.6m、東西1mの範囲で古墳時代前期の土器が一括遺棄されたような状態でまとめて出土した（第14図・写真図版6-2）。これらの土器は完形品が多く含まれており、使用後すぐにこの場所に遺棄されたものとみられる。図面上では甕1点のみ北側にやや離れて検出しているが、この甕のすぐ南は調査時に下層確認トレーニングを設定し掘削し、その後遺構掘削時にも最初にトレーニングを設定し掘りはじめた地点であつて、多くの土器を取り上げてしまつており、土器群はこの空白部分にも存在していた。この甕も同じ土器群に属するとは確かである。この土器群の遺物は、土師器甕（第16図-40～43）、低脚甕（第16図-44・45）、高甕（第16図-46）、小型器台（第16図-47）、直口甕（第16図-48）、小型丸底甕（第16図-49・50）などを図化した。これらの出土遺物から、この土器群はおおよそ古墳時代前期の布留2式期に属するとみられる。

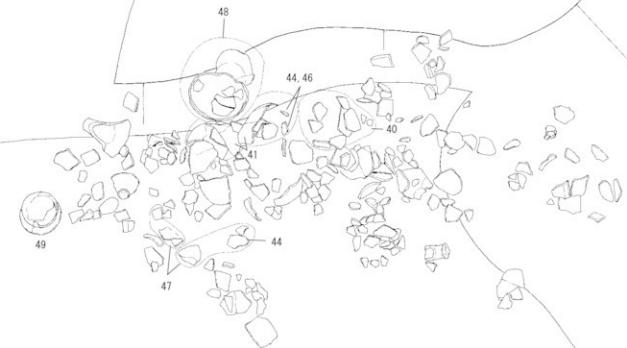
Y=-32,402



50



49



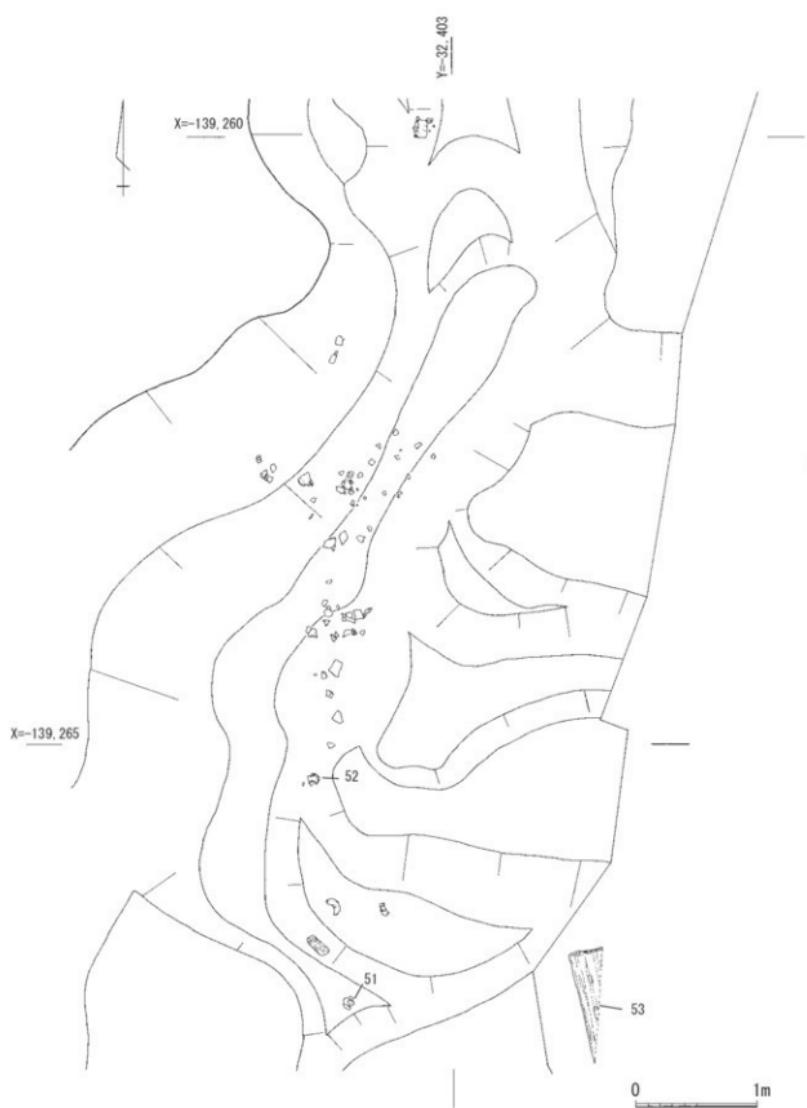
Y=-32,404

X=139,254

Y=139,256

0 50cm

第14図 溝1遺物出土状況図(OM2015-1)



第15図 溝1・2合流部遺物出土状況図（OM2015-1）

また、溝1・2の合流部では多くの土器が溝1から溝2へと流れ込んだような状況で出土した（第15図・写真図版7-1）。この部分で出土し図化した遺物は、土師器高壺（第17図-51）、小型丸底壺（第17図-52）である。これらの遺物群は溝1の土器群より新しい要素を持ち、おおよそ布留3～4式期ごろに属するとみる。

溝2 1地区の南半で検出した。北東から南西へと弧を描くような形をした大溝で、東端南端ともに調査地区外に延びている。南端の調査地区外は旧建物により攢乱されている。遺構の北岸の肩のみ検出した。検出できた規模は長さ約9.2m、東端部分の幅7.9m以上、南端部分の幅7.7m以上、深さは東端部分で2.510m、南端部分で2.231mである。標高は東端部分の北側上端がT.P.+23.510m、底部がT.P.+21.000mで、南端部分の西側上端はT.P.+23.228m、その付近に位置する最底部はT.P.+20.997mであった（第11図・巻頭写真図版1・写真図版6-1）。遺構下端から反転しておおよその規模を推定すると、幅12mほどの大溝であろう。溝2は溝1と切り合い関係はなく、古墳時代前期に同時に機能していた遺構である。中層以下では須恵器を伴わず土師器のみの出土であるが、溝2上層（東壁第27層）では、古墳時代後期に属するMT15～TK10型式頃の須恵器も出土しており、溝2の最終的な埋没はその時期とみられる。なおこの溝2上層では碗形津も出土している。東壁第44層からは建築部材（第17図-53）が出土した。

溝10 3地区で検出した。北西から南東へと向いた溝で、東端西端とともに調査地区外に延びている。検出できた規模は長さ約3m、幅4.9m、深さは西端部分で1.137m、東端部分で1.453mである。標高は西端部分の北側上端がT.P.+22.377m、南側上端がT.P.+22.352m、底部がT.P.+21.240mで、東端部分の北側上端はT.P.+22.394m、南側上端はT.P.+22.336m、その付近に位置する最底部はT.P.+20.941mであった（第11図・写真図版8-2）。土師器片や、古墳時代中期後葉のTK47型式期に属するとみられる須恵器片蓋などが出土したが、細片で図化できるものはなかった。

河川11 2地区で検出した。調査時は溝10と同一の遺構と認識していたが、調査中から埋土が全く異なることが注意され、平面図作成の結果流水方向も異なることが判明したので別遺構であることがわかり、調査後に遺構番号を分けた。遺構の上端は両岸とも調査地区外にあるものとみられ、2地区付近は地表下約1.4mが攢乱されているため両肩とも失われている可能性がある。2地区内で肩状に検出したのは河川の中端である。2地区で掘削した土層は全てこの河川内の埋土であった。河川11は南東から北西へと流れていって、両端ともに調査地区外に延びている。検出できた規模は長さ約4.8m以上、幅約6.2m以上、中端の幅3.1m、検出した深さは最大2.1m、中端からの深さは1.5mである。標高は北端部分の東側中端がT.P.+21.704m、底部がT.P.+20.241mで、南端部分の西側上端はT.P.+21.694m、底部はT.P.+20.313mであった（第11図・写真図版7-2）。調査中は溝10と一緒にのものと認識していたため、遺物は「2地区の溝10」のものとして取り上げている。須恵器壊身（第18図-54）、縄文土器片（第18図-55）、子持勾玉（第18図-56・写真図版8-1）などが出土した。縄文土器は河川内最下層（第14層）からの出土で、古墳時代後期の遺物は中から上層で出土した。第14層から出土したのは縄文時代の遺物のみであり、河川11の最下層（第14層）は遺物が示す縄文時代晚期頃に堆積したものとみられる。中から上層は、遺物が示す6世紀中ごろを中心とした古墳時代後期の堆積であろう。

2. 中世の遺構

中世の遺構はいずれも1地区で検出したものである（第11図・巻頭写真図版1・写真図版6-1）。古墳時代前期の遺構である溝1・2と同一遺構面で検出した。遺物は細片が多く図示しなかった。各遺構の概要は次のとおりである。

土坑4 1地区の中央西端で検出した。第11図では溝1を優先掲載するため図示しなかつたが、遺構肩のラインは溝1の西側肩と一部を除いてほぼ一致し、土坑4が溝1を切っている。遺構西側は調査区外のため全容は不明だが、検出できた規模は東西約2m、南北約6mの円形を呈する。遺構は旧耕作地の段差の上段部分と下段部分の境目で両側にわたっており、この遺構埋没より後に、台地状に高まる土地の境目部分にあたるこの場所に旧耕作地の段差の成形が行われたとみられる。深さは最大約0.5mである。土師質土器小片、12世紀中ごろの瓦器碗が出土した。

柱穴5 1地区の北西寄りの位置で検出した。東西0.6m、南北0.45mの隅丸長方形を呈する。深さは0.434mである。上端の標高はT.P.+24.440m、下端はT.P.+24.006mであった。T.P.+24.248~24.261mで段状になり、遺構東寄りが一段深くなる。柱が据えられていた跡とみられる。

柱穴6 1地区の北半中央の位置で検出した。直径0.41mの円形を呈する。西半上層を近世以降の擾乱により切られる。深さは0.741mである。上端の標高はT.P.+24.585m、下端はT.P.+23.844mであった。柱穴5と6は組み合う可能性がある。

土坑7 1地区の北端の位置で検出した。直径0.35mの円形を呈する。深さは0.294mである。上端の標高はT.P.+24.561m、下端はT.P.+24.267mであった。土師質土器皿の小片が出土した。

土坑8 1地区的北端の位置で検出した。東西0.78m、南北1.25mの隅丸長方形を呈する。深さは0.236mである。上端の標高はT.P.+24.591m、下端はT.P.+24.355mであった。瓦器碗、土師質土器皿、東播系須恵器練鉢などが出土した。出土遺物から13世紀の遺構である。

溝9 1地区的北端の位置で検出した。南北方向の直線的な溝で、北端は調査地区外に延び旧建物により擾乱される。南端は土坑8に切られている。検出できた規模は長さ0.7m、幅0.5m、深さは0.109mである。標高は上端がT.P.+24.562m、下端はT.P.+24.453mであった。土師器片、土師質土器皿の小片が出土した。

(實盛)

第3節 出土遺物

1. 溝1出土遺物

土器類

40 壺 口径：13.0 cm。胴部径：17.5cm。器高：18.9 cm。厚さ：0.2～0.4 cm。色調：灰白色（2.5Y 8/2）。胎土：砂粒・金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：ほぼ完形。出土標高は T.P. + 23.770m。（第14図-40、第16図-40、写真図版 11-1-40）

41 壺 口径：14.0 cm。胴部径：20.1cm。器高：17.6 cm（残存）。厚さ：0.2～0.4 cm。色調：外面はにぶい黄橙色（10YR 7/2）、内・断面は橙色（2.5YR 6/6）。胎土：砂粒をやや多く、金雲母を少し含む。焼成：良好。残存度：1/3。出土標高は T.P. + 23.753m。（第14図-41、第16図-41、写真図版 11-1-41）

42 壺 口径：13.6 cm。胴部径：18.4cm。器高：19.4 cm。厚さ：0.25～0.4 cm。色調：灰白色（7.5YR 8/2）。胎土：砂粒・金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：5/6。出土標高は T.P. + 23.804m。（第14図-40、第16図-40、写真図版 11-1-40）

43 壺 口径：15.6 cm（復元）。胴部径：20.7cm。器高：24.5 cm（復元）。厚さ：0.4～1.0 cm。色調：内面は浅黄橙色（7.5YR 8/3）、外面は橙色（5YR 7/6）、底部片はにぶい褐色（7.5YR 5/3）。胎土：やや密。直径4 mm以下の長石・石英・黒色鉱物等を多く含む。焼成：良い。残存度：4/7。口縁部外面ヨコナデ、胴部外面は三分割タタキ、内面はナデ。粘土接合痕あり。出土標高は T.P. + 24.113m。（第14図-43、第16図-43、写真図版 11-1-43）

44 低脚壺 口径：11.2 cm。器高：4.65 cm。厚さ：0.2～0.8 cm。色調：内面は灰白色（2.5Y 8/2）、外面は浅黄橙色（10YR 8/4）、一部明赤褐色（2.5YR 5/8）。胎土：砂粒・金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：2/3。口縁は稍円形に変形。口縁部内外面ヨコナデ、他はナデ成形。山陰系か。出土標高は T.P. + 23.724m。（第14図-44、第16図-44、写真図版 11-2-44）

45 低脚壺 口径：11.5 cm。器高：5.0 cm。厚さ：0.2～0.9 cm。色調：内面は浅黄橙色（10YR 8/4）、外面は浅黄橙色（10YR 8/4）、一部明赤褐色（2.5YR 5/8）。胎土：砂粒・金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：脚の1/3欠損以外はほぼ完形。口縁部内外面ヨコナデ、他はナデ成形。山陰系か。41、44、46 が出土した付近で出土。（第16図-45、写真図版 11-2-45）

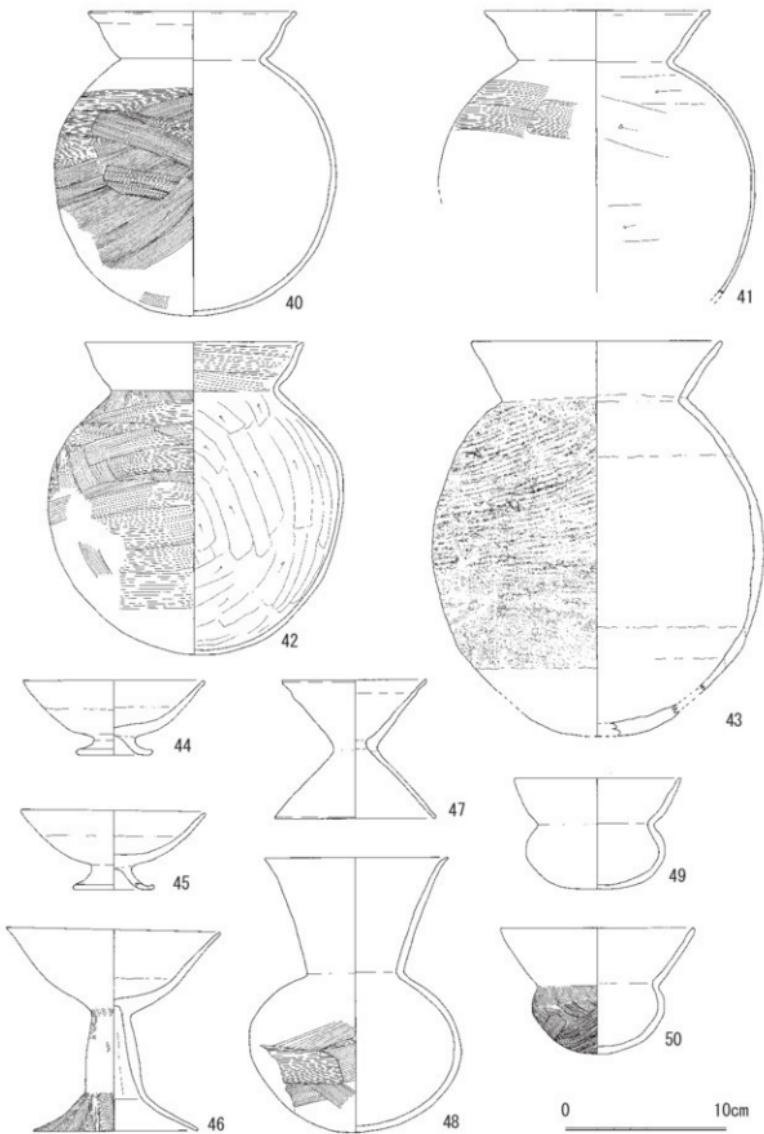
46 高壺 口径：13.3 cm。底径：10.2cm。器高：12.7 cm。厚さ：0.2～0.9 cm。色調：内面は橙色（2.5YR 7/6）、外面はにぶい黄橙色（10YR 7/3）。胎土：砂粒・金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：ほぼ完形。壺口縁部ヨコナデ、脚部はハケのちナデ。出土標高は T.P. + 23.832m。（第14図-46、第16図-46、写真図版 11-2-46）

47 小型器台 口径：9.0 cm（復元）。底径：10.0cm（復元）。器高：8.6 cm。厚さ：0.2～0.7 cm。色調：外面はにぶい橙色（7.5YR 7/4）。胎土：やや粗。直径1 mm以下の長石・雲母等を多量に含む。焼成：良好。残存度：2/3。小型鼓形器台。口縁部内面ヨコナデ。その他は風化が著しく調整不明。脚部が第14図に示した位置で出土し、壺（台）部がその取り上げ後にその下部から出土。脚部片の出土標高は T.P. + 23.712m。（第14図-47、第16図-47、写真図版 11-2-47）

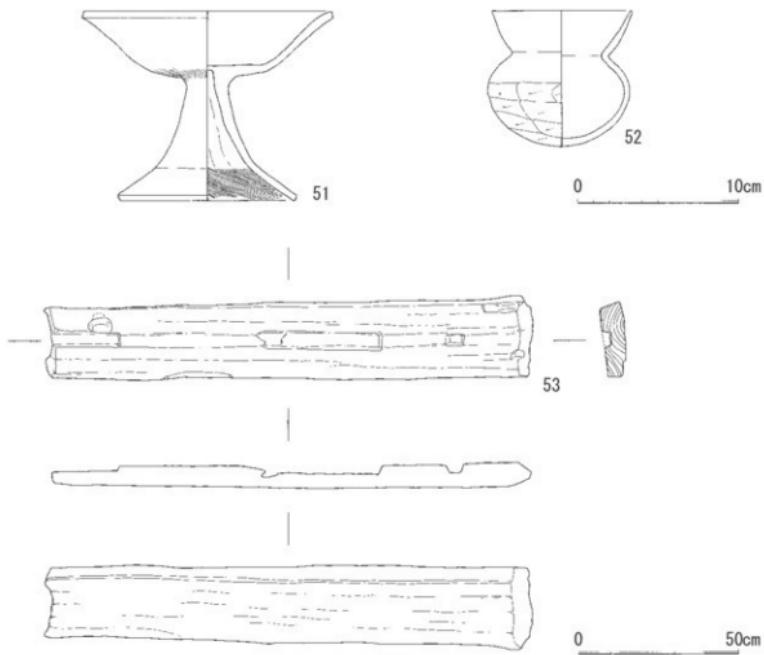
48 直口壺 口径：11.4 cm。胴部径：13.1cm。器高：17.1 cm。厚さ：0.2～0.5 cm。色調：内・断面はオリーブ黒色（7.5Y 3/1）、外面は浅黄橙色（10YR 8/4）。胎土：砂粒・金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：4/5。口縁部内外面ヨコナデ、胴部内面ナデ。出土標高は T.P. + 23.783 m。（第14図-48、第16図-48、写真図版 11-2-48）

49 小型丸底壺 口径：10.3 cm。器高：6.9 cm。厚さ：0.2～0.4 cm。色調：内面は明赤褐色（5YR 5/6）、外面は橙色（5YR 7/6）。胎土：砂粒やや多く、金雲母を極小含む。焼成：良好。残存度：ほぼ完形。口縁部内外面ヨコナデ、他はナデ成形。出土標高は T.P. + 23.840m。（第14図-49、第16図-49、写真図版 11-2-49）

50 小型丸底壺 口径：12.0 cm。器高：7.85 cm。厚さ：0.3～0.5 cm。色調：内・外面は橙色（5YR 7/8）。胎土：砂粒・金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：ほぼ完形。出土標高は T.P. + 23.796m。（第14図-50、第16図-50、写真図版 11-2-50）



第16図 出土遺物(OM2015-1) (1)



第17図 出土遺物(OM2015-1) (2)

2. 溝1・2合流部出土遺物

土師器

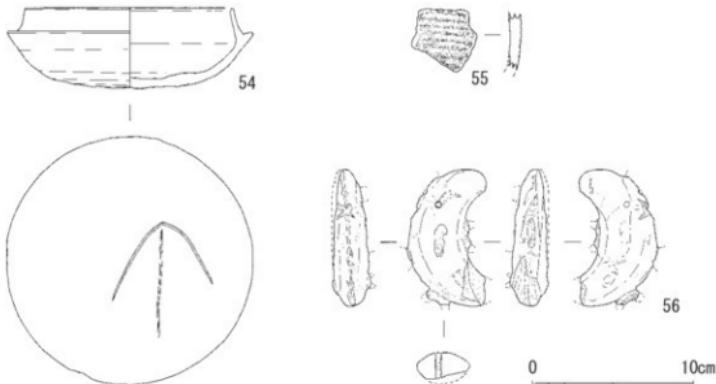
51 高壺 口径：15.4 cm。底径：10.8 cm。器高：11.8 cm。厚さ：0.4～1.2 cm。色調：内・外・断面は灰白色 (2.5Y 8/2)。胎土：砂粒を少し含む。焼成：良好。残存度：1/2。壺部内外面ヨコナデ、脚胴部外面タテナデ、裾部ヨコナデ、内面シボリ痕あり。出土標高は T.P. +21.753m。(第15図-51、第17図-51、写真図版 12-1-51)

52 小型丸底壺 口径：8.7 cm。器高：8.45 cm。厚さ：0.2～0.5 cm。色調：内・外面は灰白色 (10YR 8/2)。胎土：砂粒やや多く、金雲母を極小含む。焼成：良好。残存度：2/3。口縁部内外面および胴部上半外面ヨコナデ、胴部内面ナデ。出土標高は T.P. +22.056m。(第15図-52、第17図-52、写真図版 12-1-52)

3. 溝2出土遺物

木製品

53 建築部材 長さ：152 cm。幅：25.5 cm。厚さ：7.5 cm。両端には折り取り痕跡がある。表面に複数の方形もしくは長方形の加工があり、扉基礎等の部材を再加工したものとみる。出土標高は T.P. +21.819m。(第12図-⑤、第15図-53、第17図-53、写真図版 12-2-53)



第18図 出土遺物(OM2015-1) (3)

4. 河川11出土遺物

須恵器

54 坯身 口径：12.8cm。最大径：15.3cm。器高：5.0cm。厚さ：0.25～0.8cm。色調：内・外面は灰白色（2.5Y 7/1）。胎土：やや密。直径4mm以下の長石、石英、雲母を多く含む。焼成：良好。残存度：完形。底部にヘラ記号があり、市内出土埴輪に同様の記号がある（四條畠市史編さん委員会編 2016）。底部の回転ヘラケズリは中心から外側へと反時計回りに3回転半施す。底部中央一部ヘラ切り未調整。II型式3段階（TK10型式古段階）。口縁を上にして出土し、出土標高はT.P. +21.571mである。（第11図-54、第18図-54、写真図版13-1-54）

縄文土器

55 体部片 残存高：4.0cm。厚さ：0.7cm。色調：内・外・断面にはぶい褐色（7.5YR 5/3）。胎土：粗。直径4mm以下の白色鉱物、雲母を多く含む。焼成：良い。残存度：小片。深鉢胴部か。外面は条痕文（7条以上）、内面はナデ。滋賀里式（細分不明）。縄文後期末から晩期前半。第14層出土。（第18図-55、写真図版13-1-55）

石製品

56 子持勾玉 長さ：8.5cm。幅：4.0cm。厚さ：2.4cm。色調：オリーブ灰色（2.5G 5/1）。遺物としては完形。ただし遺棄以前に図裏面上部1/3程剥離し、その後磨耗している。1/3剥離部にその後の研磨痕なし。10子を持つとみられるが、欠け・磨滅が著しい。滑石製である。孔は図表面からの片面穿孔で、内面に工具回転痕あり。出土標高はT.P. +21.486mである。（第11図-56、第18図-56、写真図版13-1-56、14-1-56）

(實盛)

第8章 岡山南遺跡（OM2015-1）調査のまとめ

第1節 調査のまとめ

岡山南遺跡の今回の調査では、1地区で周辺では皆無であった古墳時代前期の遺構を確認した。また2・3地区では古墳時代後期に属する遺構を確認した。さらに、2地区的河川最下層からは縄文時代の遺物が出土した。以下、それぞれ検出した遺構の時期ごとにまとめを行いたい。

縄文時代 縄文時代の遺物は、2地区で検出した河川11の最下層である第14層から出土した。遺物は小片ばかりで風化しており、図化できたものは1点のみであるが、6次調査で大溝の最下層から出土したとの出土状況や遺物の時期ともに同様である（野島1982）。この河川11最下層は遺物が示す縄文時代晚期に堆積したと考えられる。周辺に縄文時代晚期の集落が存在した可能性は十分に考えられる。今後のこの地域での発掘調査で、この時期の集落が発見できることを期待したい。

古墳時代前期 古墳時代前期の遺構は、1地区で2本の溝を検出した。溝1からは多くの土器が完形に近い状態でまとまって出土し、これらの土器はおおよそ布留2式の時期でまとまっていて、一括資料であるとみる。この土器群の性格は、祭祀利用され溝に遺棄されたものと現時点ではみておきたい。出土した中に1点タタキ調整された甕が含まれていた。図面上では1点のみ北側にやや離れて検出しているが、この甕のすぐ南は調査時に下層確認トレンチを設定し掘削し、その後遺構削削時にも最初にトレンチを設定し掘りはじめた地点で、多くの土器を取り上げてしまつており、土器群はこの空白部分にも存在していた。この甕も同じ土器群に属するとは確かである。布留2式期にはタタキ調整された甕は残らないとされることが多いが、この資料はその点で注意を要する資料と言えるだろう。

溝1と2の合流部では溝1の土器群よりやや新しい土器が出土している。溝1と2は、合流部の断面観察では徐々に埋没しながら同時併存していて切り合い関係はないことを確認している。合流部で出土した土器は、溝1の土器群埋没後浅くなつた溝1で使用され、相対的に深い溝2へと流れ出て出土地点に遺存したものと考えたい。なお、1地区北側部分の台地状の高まりで溝1以外に古墳時代前期の遺構を全く検出せず中世の遺構のみであったので、中世段階で台地上が削平されている可能性を考えたい。

古墳時代後期 古墳時代後期の遺構は、2・3地区で溝と河川を検出した。当初は同一遺構とみていたが、遺構の方向や埋土の違い等からみると、異なる遺構のようである。3地区的溝は細片の遺物が少量出土ただけで、遺構の性格等は不明であった。2地区的河川ではTK10型式古段階の完形の須恵器坏身とともに子持勾玉が出土した。四條畷市内では中野遺跡で出土していて（村上2000）、2点目の出土であった。それら2点の遺物は、河川において水に関連する祭祀等に使用されたものであろう。

このように、この調査では複数の時期の遺構を検出し、これまでに不明確であった遺跡北西部の様相について知見を得ることができた。岡山南遺跡は、これまで主に古墳時代中期～後期の成果がクローズアップされ、埴輪が出土する集落遺跡として認知されている。今回の調査でもその時期の遺構を検出し、新たな知見を加えることができた。

さらに、これまで周辺では検出されることがなかった古墳時代前期の遺構を検出することができた。遺跡付近には、今回の調査地から北西に500mの位置に、古墳時代前期中頃の前方後円墳である忍岡古墳が存在する。忍岡古墳の被葬者の勢力基盤として対応する集落としては、これまで古墳から西に1kmの距離にある讃良郡条里遺跡の集落（後川・實盛・井上編2015）等が想定されていたが、今回の調査で古墳からさらに近い距離にある集落の存在を想定することが可能になった。岡山南遺跡で今回検出した遺構も、讃良郡条里遺跡の集落と同様、忍岡古墳の被葬者の勢力基盤の一つとなつた集落に属するとみてよいであろう。古墳時代前期におけるこの地域の様相は、忍岡古墳が存在すること以外これまで不明な点が多かつたが、讃良郡条里遺跡の調査も含め、古墳とその勢力基盤となる集落の存在が徐々に明らかになってきたと言えるだろう。今後も、この点については調査を継続し、忍岡古墳の被葬者の勢力圏等も含め検討していきたい。

（實盛）

第2節 讀良地域の古墳時代前期

1. はじめに

岡山南遺跡の調査では、布留2式期の良好な一括資料を含む古墳時代前期の遺跡を調査することができた。岡山南遺跡が属する讀良地域（寝屋川市南部・四條畷市・大東市北部）においては、これまで忍岡古墳の存在は知られていても、近年まで古墳時代前期のまとまった集落が知られておらず、第二京阪道路建設に伴う調査等でようやくその存在が明らかになってきた経緯がある。ここではそれらの遺跡も概観しながら、岡山南遺跡を含むこの地域の古墳時代前期について歴史的状況を整理し、岡山南遺跡の位置付けについても検討したい。

これまでに讀良地域の古墳時代前期については、忍岡古墳の存在についてのみから語られることが多かった。それは、忍岡古墳以外にこの地域で古墳時代前期の古墳や集落遺跡などがほとんど知られていなかっただためである。その状況に変化が生まれてきたのは第二京阪道路の発掘に伴い、庄内式期から布留式期にかけての集落域や墓域の調査が進んできてからである。

おもに墳墓の面から検討したものとしては、西田敏秀による北河内地域全体の検討や（西田 2009）、野島稔による讀良地域中・南部の古墳時代全体を通じての検討（野島 2009）などがあげられる。

おもに集落という視点から検討したものとしては、濱田延充による一連の検討や（濱田 2004, 2009）、市村慎太郎による堅穴建物に重点を置いた検討（市村 2009）などがある。

首長墓と集落の関係という視点では、井上智博が第二京阪道路の調査段階から小路遺跡の前方後方形周溝墓と周辺集落との関係について注意した（井上 2004）。その後福永伸哉や（福永 2008）、田中元浩（田中 2009）がその点について検討を行い、米田敏幸は土器編年と古墳の対応の検討を行っている（米田 2013）。

また全体の概観として一瀬和夫はこの地域も含め地域・時期とも全体を通してみた遺跡の概観を行っている（一瀬 2005）。

首長墓と集落の関係性は、上記にあげたような検討で、小路遺跡の前方後方形周溝墓については盛んに言及がみられるが、忍岡古墳についてはあまり活発とはいえない。本節では、忍岡古墳と周辺集落の関係性についても検討し、そのなかで今回発掘調査した岡山南遺跡の成果を位置づけるとともに、讀良地域の古墳時代前期における動態について整理することとしたい。

2. 讀良地域古墳時代前期の首長墓（1）小路遺跡前方後方形周溝墓

讀良地域の首長墓として、まず出現するのは寝屋川市の小路遺跡で検出された前方後方形周溝墓と言ってよいであろう（木下編 2004、六辻編 2006）。小路遺跡では、一辺数mから10m前後の方形周溝墓群がみつかったが、その墓群の中に1基、全長22.7mと卓越した規模の前方後方形周溝墓が含まれていた。この周溝墓は後方部が長さ12.2m、幅10.2mで、前方部は長さ10.5m、前方部端の幅7m、くびれ部の幅3.4mであった。周溝墓の上部は削平されていて主体部はみつからなかったが、周溝内で土器がみつかっており、出土した土器から庄内式～布留式期初頭の周溝墓とみられている。

この周溝墓の周囲ではほぼ同時期の方形周溝墓群も検出されていて（木下編 2004、黒須編 2004）、墓域の中の一基の墳墓が卓越した規模となっている状況を読み取ることができる。

他の方形周溝墓群と同一墓域に築かれているという点では、のちの典型的な前期古墳とは異なる様相であるが、卓越した規模をもっている点、墓域にある他の周溝墓と異なる墳形である点から、やはり首長墓として取り扱ってよいであろう。

3. 讀良地域古墳時代前期の首長墓（2）忍岡古墳

小路遺跡の前方後方形周溝墓の後に北河内南部唯一の規模で造られたのが、全長約87mの前方後円墳である忍岡古墳である。古墳は東側からのびる丘陵尾根の西端に位置していて、現在墳丘上には式内社である忍陵神社が鎮座している。古墳からの眺望は非常によく、古墳時代には眼下に河内湖と湖岸にあつたであろう集落の様子をみることができたことであろう。この古墳は、昭和10年（1935年）の京都大学による調査で発見された（梅原 1937）。古墳の墳丘は当時から既に改変されていたが、当

時残存していた埴丘から、古墳は一段低い基壇のような部分を持つ二段築成の前方後円墳で、主軸を南北方向に向けた後円部径約45.5m、高さ約6m、全長約87.9mの前方後円墳と想定された。墳形については、四條畷市教育委員会で行った調査で、前方部の裾がバチ形に聞く可能性が想定されている（野島2006）。葺石は存在しなかったようだが、円筒埴輪は後円部の上を中心立てられていたようである。

主体部は後円部のほぼ中央に位置し、古墳の主軸とほぼ平行する南北方向のもので、安山岩質の板石材を積み重ねた長さ約6m、幅約1m、高さ約1mの堅穴式石槨（石室）である。底部には2~30cmほどの厚さで粘土を敷き、その上に、一本の木を縦に二つに割り中を刳り抜いた剖竹形木棺が設置されていたとみられる。想定される棺の大きさは長さ約5.7m、幅約0.75mであった。埋葬施設の床面は北側がやや高く傾斜していて、頭が北側で埋葬されていた可能性がある。

この石槨はすでに盜掘されていて、北半分のほとんどが破壊されていた。粘土床の下部はすぐに古墳の盛土となっていたが、石槨の壁部分の下には厚い砂利敷きの地固めがしてあり、東側ではそれが厚さ60cm以上あった。さらに、北側ではそれが粘土の縁から90cmを超える厚さがあり、加えて下部は粘土の設置面より20cmほど深く掘られ、その基底にやや大きな割石を並べ、その上に砂利を重ね置いた構造であった。これはその上に築かれる側壁を支えるための基であるとともに、排水施設が設けられていたものとみられる。このような構造は四條畷市教育委員会で行った再調査でも確認していて、その結果を合わせると、排水施設は東西南北の各方向に設けられていたようである。

石槨の内部は一部盜掘にあっていたが、南側部分を中心に一部の副葬品が残っていて、碧玉製石劍1、碧玉製鍊形石1以上、碧玉製紡錘車6、鉄劍2、鉄大刀1、鉄鋒2、鐵鎌2、鉄刀子1、鉄小札数点、木製刀装具1括、鉄斧3、鉄鉈1、鉄織片がみつかった。これらは盜掘のため原位置を保っていたとは言い難いものが多く含まれるが、その出土状況は、石槨南側の壁に近い床の縁に刀劍片があり、粘土床のU字状に産んだ部分、つまり棺内の東南端で鉄斧が、西隅で鉄片がみつかった。また、石槨の中央から南に偏在して鉄片が多くあり、その東南の壁に近い部分から鉄片に混じって紡錘車をはじめとした主な石製品が出土した。このうち完形の紡錘車4点は、2点ずつ重なって出土した。これが原位置に近い位置からの出土であるとすれば、棺内には鉄斧等の工具類の一部が副葬され、鉄製刀劍類や石製品類などは棺外に副葬されていた可能性がある。

紡錘車のうち4点は完全な形でみつかっており、大きさもほぼ同様で、直径は4.5~4.8cmほど、高さは1cmほどであり、中央の孔は片側から穿孔したものであった。木製刀装具は、同時にみつかった鉄大刀にともなうもので、把縁の部品とみられ（櫻井2012）、直線と曲線を組み合わせた特徴的な紋様が彫られている。鉄小札は数点が出土していて、いずれも3.5×3.3cmほどの大きさである。その形から小札革縫胄の破片とみられる。

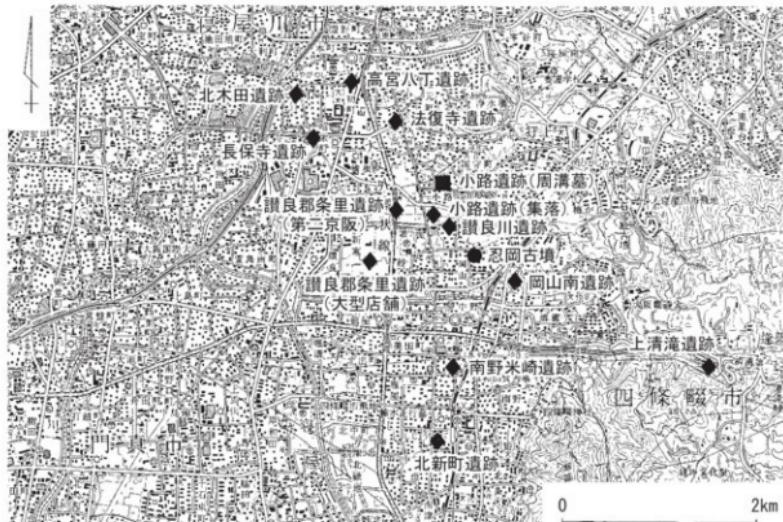
また、これら以外に盜掘により破壊されていた部分から、円筒埴輪片が出土している。これは、古墳の後円部の上に立てられていたものが、盜掘により石槨の部分に落ち込んでしまったものとみられる。また四條畷市教育委員会で行った調査でも円筒埴輪片が出土している（野島2006）。

忍岡古墳は、盜掘されていたため副葬品のすべてはみつからなかった。おそらく、盜掘されていた石槨の北側に、銅鏡数枚や被葬者が身につけていた玉類などがあったのではないかと考える。銅鏡は数枚であれば被葬者の頭の上に、玉類は被葬者の胸の位置などに副葬されることが多いが、北側は床面の傾斜から頭側の可能性があり、このこともこの位置に鏡や玉があつた可能性を示すとみる。

4. 副葬品からみた忍岡古墳の位置付け

忍岡古墳は、埴丘の規模や残されていた副葬品の内容から、古墳時代前期中頃の、北河内南部地域における首長墳であると考えられる。

忍岡古墳で出土した遺物をみると、古墳時代前期の中でも先出する要素と、後出する要素とが混在している。小札革縫胄は、古墳時代前期の中でも前半の古墳に副葬されることが多い古いものである（橋本1996）。腕輪形の石製品（石劍や鍊形石）は、古い型式のものが副葬されている。石劍は蒲原編年のI-a1型式にあたり（蒲原1987）、鍊形石も最古型式である（北條1990）。一方で、碧玉製紡錘車は、清喜裕二による第二段階にあたり、やや新しい型式のものが副葬されている（清喜2013）。



第19図 讀良地域の古墳時代前期遺跡

(国土地理院5万分1地形図「大阪東北部」(2008)に加筆)

刀装具の紋様も、この種の紋様の中ではやや新しいものとされる（櫻井 2012）。円筒埴輪は、川西編年II期のものが含まれているようである（川西 1978）。こういった要素を考え合わせると、忍岡古墳は古墳時代前期の中でも中ごろの古墳と考えることができるであろう。『前方後円墳集成』編年（近藤編 1992）では2～3期、大賀編年（大賀 2002）では前IV～V期ごろにあたるとみておきたい。

ここで注目したいのは、この古墳から小札革綴冑が出土していることである。この小札革綴冑は、中国系の製品である可能性が高く（高橋 1995）、全国で十数古墳からの出土が確認されていて、奈良県の黒塚古墳や、京都府の椿井大塚山古墳など、三角縁神獸鏡を多量に副葬する有力な古墳でみつかる傾向が強いものである（福永 2009）。この小札革綴冑が出土していることは、忍岡古墳の被葬者が、当時のヤマト王権と密接な結びつきがあり、そのために中国系の製品である冑を下賜された可能性があることを示している。忍岡古墳の被葬者は、ヤマト王権内で一定の地位を得ていた人物だったと考えられる。

副葬されていた遺物には刀剣類や鉄鏃などの豊富な武器類や、腕輪形石製品の中でも男性的な要素を持つ銀形石が含まれており（小栗 2008）、この古墳に葬られていた人物は男性であった可能性がある。

忍岡古墳は、眼下に河内湖が広がる丘陵先端部に造られている。忍岡古墳の被葬者は、河内湖を使った船による流通を掌握し、ヤマト王権内での地位を得ていた人物だったのであろう。

5. 讀良地域古墳時代前期の集落様相

小路遺跡の前方後方形周溝墓に対応するもしくは近接した時期にあたる、庄内式期～布留式初頭の集落は、前方後方形周溝墓の位置からみて南側で最近庄内式期を中心とした集落がみつかっている（寝屋川市教育委員会 2015）。前方後方形周溝墓からみて南西 200m の、讀良郡条里遺跡の第二京阪道路調

査地では庄内式期はじめごろの堅穴建物群が検出されている（井上編 2008）。長保寺遺跡では河川内から庄内式期の土器がまとめて出土している（濱田 1993）。法復寺遺跡と北木田遺跡でも庄内式期の遺構が検出されている（濱田 2004）。このように讃良地域北部ではこの時期の遺物の出土があり、小路遺跡・讃良郡条里遺跡付近には頗著な集落も存在していたが、讃良地域中～南部ではこの時期の遺構・遺物はみつかっておらず、現在のところ讃良地域中～南部でこの時期の集落の存在を想定することはできない。

その後、忍岡古墳に対応するもしくは近接した時期にあたる布留式期の集落は、讃良郡条里遺跡の大型店舗調査地で布留 1 式期の井戸や土坑と、同時期とみられる掘立柱建物、布留 3～4 式の土器群等がみつかっていて（後川・實盛・井上編 2015）、第二京阪道路調査地の成果（佐伯・六辻編 2007）と併せ、讃良郡条里遺跡はこの時期の比較的頗著な集落と言える。遺物の出土は北木田遺跡で布留式初めごろの、高宮八丁遺跡で布留式後半のものがみられ（濱田 2004、市村 2009）、讃良川遺跡（濱田 2004）や南野米崎遺跡（1984 年度調査）、上清滝遺跡でも布留式期の遺物が出土している。南部では北新町遺跡で布留式期の集落・水田が検出されている（大東市北新町遺跡調査会編 1991、黒田 1997）。ここに今回岡山南遺跡で検出した大溝と布留 2 式期を中心とした土器群が加わった。前段階とくらべ中～南部での集落の伸長が著しく、それに比して北部での遺構・遺物の密度は相対的に低下するが、消滅するわけではなく、讃良地域全体に遺構・遺物が分布しているようである。集落域についても讃良郡条里遺跡付近と北新町遺跡付近に比較的規模の大きな集落が検出されている。

6.まとめ

このように、讃良地域の首長墓と、それぞれに対応する可能性のある集落について検討してきた。讃良地域では、庄内式～布留式期初頭ごろ（3世紀中ごろ）に小路遺跡で前方後方形周溝墓が築かれる。この墳墓が築かれる基盤となった集落としては、直接的には小路遺跡や讃良郡条里遺跡一帯に存在した集落があげられ、それら以外にも讃良地域北部に衛星的に集落が存在したものとみられる。小路遺跡の前方後方形周溝墓に葬られた首長の基盤となったのは、このように讃良地域北部を中心としていたのであろう。

その後、古墳時代前期中ごろ（3世紀末～4世紀初頭ごろ）には忍ヶ岡丘陵先端に忍岡古墳が築かれる。やや空白期間が長いが、近接した地域に築かれており、現時点では小路遺跡の前方後方形周溝墓と同一の系譜に属するものとみておく。小路遺跡の首長の次世代もしくは次々世代の首長が忍岡古墳の首長であると考えたい。この古墳の基盤集落としては、現時点では遺構数、遺物量が多い讃良郡条里遺跡の集落が第一にあげられよう。岡山南遺跡は讃良郡条里遺跡よりも古墳に近く、遺物量が出土しているので、集落遺構は未発見だが基盤集落のひとつが存在した可能性は十分にある。これら以外にも遺物出土遺跡が広範にみられ、忍岡古墳の首長の基盤となった地域は少なくとも讃良地域全域にわたっていたものと考えたい。そうした視点でみると、古墳からは 1.7km ほど離れている北新町遺跡も、忍岡古墳の首長の基盤のひとつとなっているとみてよいであろう。

讃良地域の古墳時代前期は、これまで忍岡古墳のみの存在がクローズアップされ、あるいは被葬者は中央から派遣されてきた人物ではないかと考えられがちであった。しかし、近年調査が進んできた結果、首長墓系譜や集落動態を追うことが可能になった。今回の岡山南遺跡での調査成果も、そのような成果の一つであると言える。今後もさらに調査を蓄積し、この地域の古墳時代前期の歴史復元を試みていきたい。

（實盛）

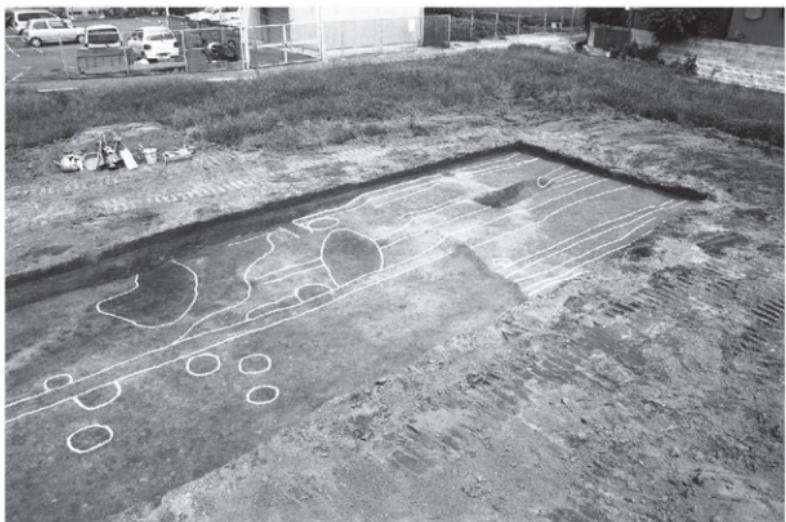
参考文献

- 後川忠太郎・實盛良彦・井上智博編 2015『讀良都条里遺跡』四條畷市教育委員会・寝屋川市教育委員会・公益財團法人大阪府文化財センター、阿部幸一 1999『雁屋遺跡発掘調査概要』IV、大阪府教育委員会。
- 一瀬和夫 2005『河内平野変遷に関する覚書』『古代学研究』第169号、古代学研究会。
- 市村慎太郎 2009『古墳出現頃の北河内のムラ』『古墳出現前夜の北河内』寝屋川市・寝屋川市教育委員会。
- 井上智博 2004『讀良都条里遺跡へ駆け足見された古墳時代遺跡』『邪馬台国と北河内』寝屋川市・寝屋川市教育委員会。
- 井上智博・多賀晴司編 2003『讀良都条里遺跡』その2、財团法人大阪府文化財センター。
- 井上智博編 2008『讀良都条里遺跡』VI、財团法人大阪府文化財センター。
- 岩瀬 透・藤田道子・宮崎泰史・藤永正明編 2010『御塩北遺跡』I、大阪府教育委員会。
- 岩瀬 透編 2012『御塩北遺跡』II、大阪府教育委員会。
- 梅原木治 1937『河内四條畷村忍岡古墳』『日本古文化研究所報告』第4、日本古文化研究所。
- 梅原木治 1985『脚蹠の研究』木林社。
- 大賀克典 2002『古墳時代の时期区分』『小羽山古墳群』清水町教育委員会。
- 小堀 桂 2008『輪輪形石器の出土状況と性差』『考古学からみた古代の女性』大阪府立近つ飛鳥博物館。
- 大阪府教育委員会編 1970『四條畷町、正法寺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会。
- 片山長三 1967a『枚方市地の先土器時代道路』『枚方市史』第一巻、枚方市役所。
- 片山長三 1967b『繩文時代道路』『枚方市史』第一巻、枚方市役所。
- 蒲原充之 1987『石劍研究序説』『日本考古学試論』掛川閣。
- 川西克幸 1978『円筒埴輪研究』『考古学雑誌』第64卷第2号、日本考古学会。
- 木下保明編 2004『小路遺跡』(その3)『町』(財)大阪府文化財センター。
- 黒須義希子編 2004『高宮遺跡』(その2)『町』(財)大阪府文化財センター。
- 黒田 淳 1989『飯盛山城跡の調査』『大東市埋蔵文化財発掘調査概要』1988年度、大東市教育委員会。
- 黒田 淳 1997『北新町遺跡第3次発掘調査要報告書』大東市北新町遺跡調査会。
- 黒田 淳 2013『飯盛山城跡測量調査報告書』大東市教育委員会。
- 古代の土器研究会編 1992『都城の土器集成』古代の土器研究会。
- 古代の土器研究会編 1993『都城の土器集成』II、古代の土器研究会。
- 小林和一 2008『東アジアにおける武器・武術の比較研究』奈良文化財研究所。
- 近藤雄子・山本雅和・多賀晴司編 2006『讀良都条里遺跡』IV、財团法人大阪府文化財センター。
- 近藤雄子編 1992『前方後円錐集成』近畿編、山川出版社。
- 佐伯利光・六代彩香編 2007『讀良都条里遺跡』V、財团法人大阪府文化財センター。
- 櫻井久夫 1972『考古学』『四條畷市史』第1巻、四條畷市役所。
- 櫻井久夫・佐野喜美・野鳥勝 2006『ごどく史』わしたちの四條畷』四條畷市教育委員会。
- 櫻井久夫・佐野喜美・野鳥勝 2010『歴史とどりのまち』ふるさと四條畷』四條畷市教育委員会。
- 櫻井久之 2012『2つの刀剣道具による文様の統論』『日本考古学』第33号、日本考古学協会。
- 四條畷市教育委員会編 2002『みどりの里と古墳』第17回特別展、四條畷市立歴史民俗資料館。
- 四條畷市教育委員会編 2004『鳥と生きる』園館20周年記念特別展、四條畷市立歴史民俗資料館。
- 四條畷市教育委員会編 2006『ひとつの根』第23回特別展、四條畷市立歴史民俗資料館。
- 清喜裕二・史坂さん・委員会編 2013『碧玉製輪形石器の再評判』『技術と交流の考古学』同成社。
- 斎川伊則 1992『最古の木舟』『考古学・生活文化』同志社大学考古学シリーズV、同刊行会。
- 大東市北新町遺跡調査会編 1991『北新町遺跡第2次発掘調査要報告書』大東市北新町遺跡調査会。
- 大東市教育委員会・西尾順市教育委員会 2013『熊盛城跡調査測量図』大東市教育委員会・四條畷市教育委員会。
- 高橋 工 1995『東アジアにおける甲冑の系譜と日本』『日本考古学』第2号、日本考古学協会。
- 田中元治 2009『弥生時代から古墳時代へ変わる土器』『古墳出現前夜の北河内』寝屋川市・寝屋川市教育委員会。
- 田辺忠三 1981『須恵器大成』角川書店。
- 千葉 豊編 2010『西日本の織工土器』後期』真隕社。
- 中上弘研究会編 1995『絹工』、中世の土器・陶器』真隕社。
- 辻 武 1987『雁屋遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会。
- 寺沢 薫 1986『畿内古式土器鉢の編年と二、三の問題』『矢部遺跡』奈良県教育委員会。
- 中尾智行・山根、航編 2009『讀良都条里遺跡』Ⅳ、財团法人大阪府文化財センター。
- 中村 浩 2001『和泉陶冶出島土質忠器の型式編年』美譽書房出版。
- 西尾 宏 1987『中野遺跡発掘調査概要』IV、四條畷市教育委員会。
- 西尾 宏 1988『中野遺跡発掘調査概要』V、四條畷市教育委員会。
- 西野秀政 2009『「北河内」の前、中期に長基の動向と王室』『北河内の古墳』財团法人交野市文化財事業団。
- 寝屋川市教育委員会編 2015『小路跡地現地観察会』。
- 野島 稔 1977『四條畷市中野道路』『なんだ』第2号、まんだ編集部。
- 野島 稔 1978a『中野遺跡発掘調査概要』I、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔 1978b『南山下遺跡』『なんだ』第5号、まんだ編集部。
- 野島 稔 1978c『大阪府四條畷市発見の製塼土器』『古代学研究』第86号、古代学研究会。
- 野島 稔 1979『岡山南遺跡出土の古代下駄』『なんだ』第8号、まんだ編集部。
- 野島 稔 1980a『南漢古墳群発掘調査概要』四條畷市文化財研究調査会。
- 野島 稔 1980b『四條畷市奈良井遺跡』(2)『なんだ』第9号、まんだ編集部。
- 野島 稔 1980c『四條畷市奈良井遺跡』『なんだ』第9号、まんだ編集部。
- 野島 稔 1981『更良岡山古墳群発掘調査概要』四條畷市教育委員会。
- 野島 稔 1982『岡山南遺跡発掘調査概要』B、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔 1983『忍ヶ丘駅前遺跡発掘調査概要』II、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔 1984『雁屋遺跡発掘調査概要』I、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔 1985『四條畷市交野米崎遺跡』『なんだ』第24号、まんだ編集部。
- 野島 稔 1986a『四條畷市理藏山古墳発掘調査概要』1985年度一『四條畷市教育委員会。
- 野島 稔 1986b『中野遺跡発掘調査概要』III、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔 1987a『雁屋遺跡』四條畷市教育委員会。
- 野島 稔 1987b『岡山南遺跡発掘調査概要』IV、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔 1987c『四條畷市・南山下遺跡出土の馬形埴輪』『なんだ』第30号、まんだ編集部。

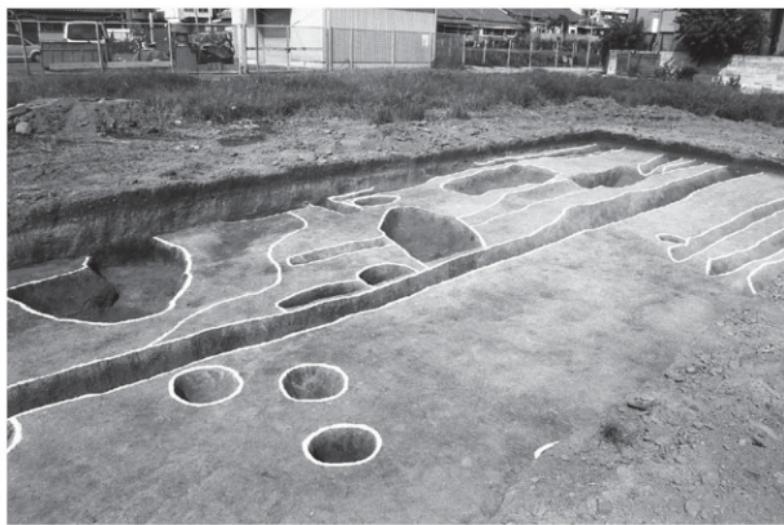
- 野島 稔 1987d 「四條畷市南山下遺跡」『まんだ』第30号、まんだ編集部。
- 野島 稔 1987e 「南野米崎遺跡」『韓式系土器研究』I、韓式系土器研究会。
- 野島 稔 1988 「四條畷市「南山下遺跡」」『まんだ』第35号、まんだ編集部。
- 野島 稔 1990 「四條畷市「中野遺跡」」『まんだ』第39号、まんだ編集部。
- 野島 稔 1991 「南野米崎遺跡」『韓式系土器研究』III、韓式系土器研究会。
- 野島 稔 1993a 「四條畷市忍ヶ丘駅跡遺跡」『まんだ』第49号、まんだ編集部。
- 野島 稔 1993b 「四條畷市鎌田遺跡(一)」『まんだ』第50号、まんだ編集部。
- 野島 稔 1994a 「四條畷市鎌田遺跡(二)」『まんだ』第51号、まんだ編集部。
- 野島 稔 1994b 「四條畷市鎌田遺跡(三)」『まんだ』第53号、まんだ編集部。
- 野島 稔 1995 「四條畷市教育委員会」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔 1996a 「四條畷市坪井遺跡」『まんだ』第57号、まんだ編集部。
- 野島 稔 1996b 「鍛冶工房のある風景」『まんだ』第58号、まんだ編集部。
- 野島 稔 1997a 「五絃の琴」『まんだ』第60号、まんだ編集部。
- 野島 稔 1997b 「四條畷市更良岡山遺跡(一)」『まんだ』第62号、まんだ編集部。
- 野島 稔 1997c 「『にははねはね』第12回特別展、西園寺頼宣立歴史民俗資料館」。
- 野島 稔 1999 「四條畷市大古墳群」『まんだ』第66号、まんだ編集部。
- 野島 稔 2000 「更良岡山遺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔 2006 「四條畷市内道路発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔 2009 「河内東北道における古墳と古代豪族の動向」『北河内の古墳』財団法人交野市文化財事業団。
- 野島 稔・藤原忠惟・花田照也 1976 「河内山南道路発掘調査概要」I、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・藤原忠惟・花田照也 1977 「河内山南道路発掘調査概要」II、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・前田 朝 1984 「岡山南遺跡・中野遺跡発掘調査概要」III、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・村上 始 2002 「奈良井遺跡・奈良井遺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・村上 始 2001 「南山下遺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・村上 始 2001 「正法寺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・村上 始・實盛良彦 2012 「奈良井遺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 橋本達也 1996 「古墳時代前期甲冑の技術と美術」『吉野山古墳の研究』雪野山古墳発掘調査会。
- 濱田和志 1993 「長保寺遺跡」寝屋川市教育委員会。
- 濱田和志 2004 「弥生時代・古墳時代の寝屋川」『郵馬台町と北河内』寝屋川市、寝屋川市教育委員会。
- 濱田延至 2009 「古墳出現前夜の牧方・交野地域」『北河内の古墳』財団法人交野市文化財事業団。
- 原田昌也・尾崎史郎編 2014 「考古資料からみる八尾の歴史」公益財團法人八尾市文化財調査研究会。
- 福永和哉 2008 「大阪平野における3世紀の『長堀と地城』」『兼ね山論叢』史学篇、第42号、大阪大学大学院文学研究科。
- 福永和哉 2009 「古代国家形成期における日々交流史の考古学的再構築」『アジア歴史研究報告書』2008年度、JFE21世紀財团。
- 北條元隆 1990 「輪輪石製鏡の成立」『兼ね山論叢』史学篇、第24号、大阪大学文献部。
- 松岡良典 1987 「中野遺跡発掘調査概要」四條畷市教育委員会。
- 宮崎泰史・藤永正明編 2006 「時代のこゝり」大阪府立近づ鳥博物館。
- 宮野博一 1992 「更良岡山遺跡発掘調査概要」大阪府教育委員会。
- 三好 玄・杉本厚典・野島 稔・深澤芳蘋 2007 「弥生時代後期圓周状遺構に伴う土器群」『大阪歴史博物館研究紀要』第6号、財団法人大阪市文化財協議会。
- 六辻香織編2006 「小路遺跡」III、(財)大阪府文化財センター。
- 村上 始 1997a 「木闇池北方遺跡発掘調査概要」四條畷市教育委員会。
- 村上 始 1997b 「忍ヶ丘駅前遺跡発掘調査概要」四條畷市教育委員会。
- 村上 始 2000 「四條畷小学校内遺跡」中野遺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 村上 始 2001a 「吉山下遺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 村上 始 2001c 「大阪府立考古学博物館」『月刊考古学ジャーナル』No. 470、ニュート・サイエンス社。
- 村上 始 2001d 「四條畷市鎌田遺跡」『まんだ』第71号、まんだ編集部。
- 村上 始 2001e 「大阪府立遺跡発掘調査」『祭祀考古』第21号、祭祀考古学会。
- 村上 始 2001f 「四條畷市雁庭遺跡」『まんだ』第73号、まんだ編集部。
- 村上 始 2003a 「奈良井遺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 村上 始 2003b 「大阪・中野遺跡」『木簡研究』第25号、木簡学会。
- 村上 始 2004 「四條畷市内遺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 村上 始 2006 『一般国道163号の扩幅工事に伴う発掘調査概要報告書』四條畷市教育委員会。
- 村上 始・實盛良彦 2011 「雁屋遺跡の発掘調査」『近畿糸介の生』第14回集会京都場所公演要旨集』近畿糸介の会。
- 村上 始・實盛良彦 2013a 「中野遺跡・奈良井遺跡・吉山下遺跡・岡山下遺跡発掘調査報告書」四條畷市教育委員会。
- 村上 始・實盛良彦 2013b 「北口遺跡・瀬良池・奈良井・吉山下・岡山下・岡山下遺跡発掘調査報告書」四條畷市教育委員会。
- 村上 始・實盛良彦 2014 「四條畷市文化財調査年報」第1号、四條畷市教育委員会。
- 村上 始・實盛良彦編 2013 「兼ね山跡発掘調査報告書」四條畷市教育委員会。
- 森岡秀人・ほか編 2003 「古墳出現期の土師器と実年代」財団法人大阪府文化財センター。
- 森岡秀人・西村 伸歩 2006 「古式土師器の年代学」財団法人大阪府文化財センター。
- 森下泰司 2005 「前期古墳器物の組合せ」『考古学雑誌』第89巻第1号、日本考古学会。
- 山口 博編 1972 「四條畷市史」第1巻、四條畷市役所。
- 山口 博 1990 「四條畷市史」第4巻、四條畷市役所。
- 木田敏幸 2013 「古式土師器から見た『河内平野の聚落と古墳』」『古墳出現期土器研究』第1号、古墳出現期土器研究会。



1. 調査前全景（西から）



2. 遺構面検出全景（南西から）



1. 遺構完掘全景（南西から）



2. 遺構完掘全景（南東から）



1. 調査前全景（北から）



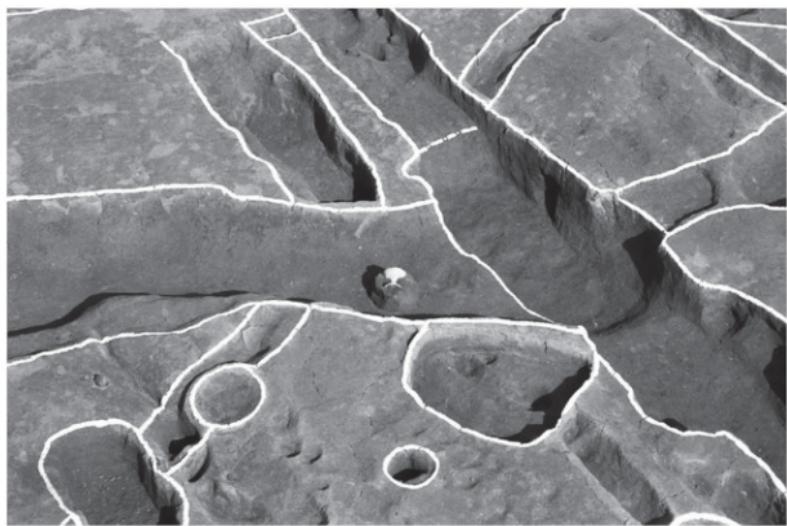
2. 東側地区 遺構完掘全景（南から）



1. 東側地区 土坑 8 遺物出土状況（南西から）



2. 東側地区 土坑 13 遺物出土状況（北東から）



1. 東側地区 溝 25 全景（北西から）



2. 西側地区 遺構完掘全景（北東から）



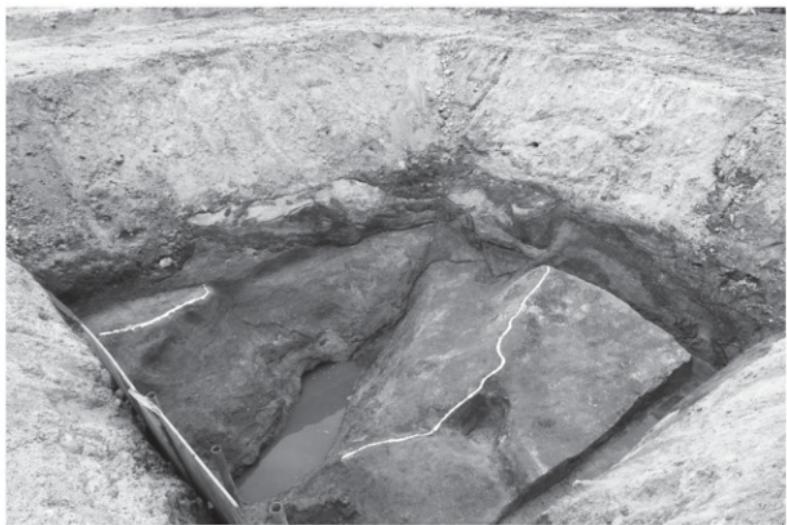
1. 1地区 遺構完掘全景（北西から）



2. 1地区 構1遺物出土状況（南東から）



1. 1地区 溝1・2合流遺物出土状況（南西から）



2. 2地区 遺構完掘全景（南東から）



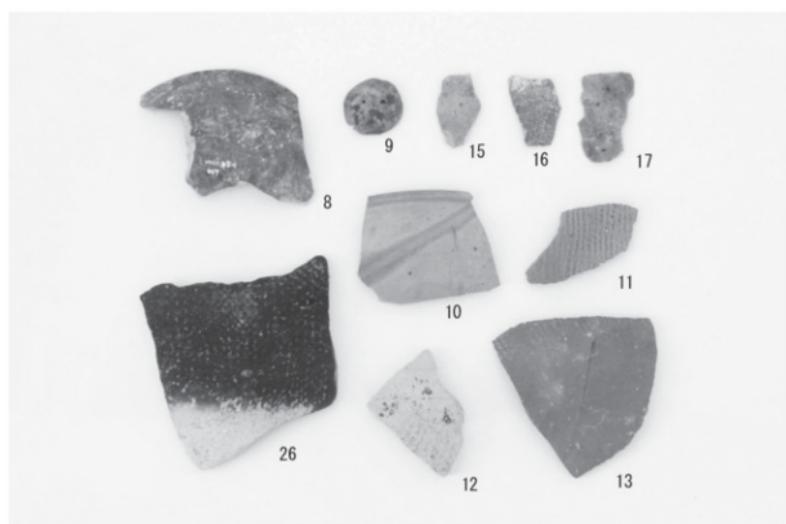
1. 2地区 子持勾玉出土状況（西から）



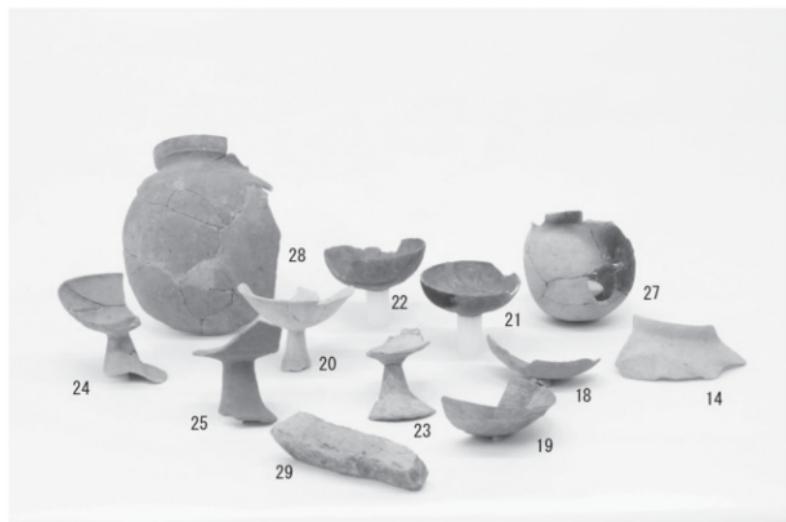
2. 3地区 遺構完掘全景（南東から）



1. MNK 2004-1 出土遺物



2. MNK 2005-1 出土遺物 (1)



1. MNK 2005-1 出土遺物 (2)



2. MNK 2005-1 出土遺物 (3)



1. OM 2015-1 出土遺物（溝1 壺）



2. OM 2015-1 出土遺物（溝1 土師器）



1. OM 2015-1 出土遺物（溝1・2合流部）



2. OM 2015-1 出土遺物（溝2 木製品）



1. OM 2015-1 出土遺物（河川 11）



2. OM 2015-1 出土遺物（河川 11 子持勾玉）

報告書抄録

ふりがな	じょうなわてしふんかざいちょうさねんぼう
書名	四條畷市文化財調査年報
巻次	第3号
シリーズ名	四條畷市文化財調査報告
シリーズ番号	第52集
編著者名	村上 始・實盛良彦
編集機関	四條畷市教育委員会
所在地	〒575-8501 大阪府四條畷市中野本町1番1号
発行日	2016(平成28)年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	市町村 コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
みなみのこめざき いせき 南野米崎遺跡 (MNK2004-1)	じょうなわてし こめざきちょう 四條畷市 米崎町	272299	34° 44' 01"	135° 38' 34"	平成16年8月 24日～平成16 年8月30日	160 m ²	宅地造成
みなみのこめざき いせき 南野米崎遺跡 (MNK2005-1)	じょうなわてし こめざきちょう 四條畷市 米崎町	272299	34° 44' 02"	135° 38' 35"	平成17年4月 18日～平成17 年5月25日	630 m ²	保育園建設
おかやまみなみ いせき 岡山南遺跡 (OM2015-1)	じょうなわてし おかやまひがし いっちょうめ 四條畷市 岡山東一丁目	272299	34° 44' 39"	135° 38' 46"	平成27年4月 6日～平成27 年5月27日	427 m ²	宅地造成

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南野米崎遺跡 (MNK2004-1)	集落跡	古墳、中世	鋤溝、土坑	土師器皿、黒色土器 碗、東播系片口鉢、 須恵器壺	
南野米崎遺跡 (MNK2005-1)	集落跡	古墳、中世	鋤溝、Pit、 溝、土坑	韓式系土器、初期須 恵器、土師器、製塙 土器、滑石製有孔円 板	
岡山南遺跡 (OM2015-1)	集落跡	縄文、古墳 中世	溝、土坑、 柱穴、河川	縄文土器、土師器、 須恵器、滑石製子持 勾玉、木製品	古墳時代前期の溝内 祭祀跡検出。深さ2.5m、 推定幅12mの大溝検出。 後期の子持勾玉出土。

四條畷市文化財調査報告 第52集

四條畷市文化財調査年報

第3号

平成28（2016）年3月31日発行

編集 四條畷市教育委員会

発行 四條畷市教育委員会

大阪府四條畷市中野本町1番1号

印刷 株式会社 共英印刷所